

解題 澤 正 宏

近現代日本語辞典選集
【モダン語辞典・事典・用語編】

第 1 卷

クロスカルチャー出版

凡 例

1. 本書は『近現代日本語辞典選集』【モダン語辞典・事典・用語編】（全4巻）の第1巻である。
2. 本書は澤 正宏氏所蔵のものを使用した。
3. 本書の底本は下記の通り。
 - 第1巻『近代詩用語辞典』河合醉茗編著（紅玉堂書店、大正13年10月5日発行）。初版。
 - 『プロレタリア文藝辞典』山田清三郎、川口浩編著（白揚社、昭和5年8月25日発行）。初版。
 - 『文學新語小辞典』生田長江編著（新潮社、大正6年5月15日発行）。第18版。
 - 『モダン語辞典』鶴沼直編著（誠文堂、昭和6年2月28日発行）。第45版。
 - 『現代術語辞典』「毎日年鑑」附録、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編纂（大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、昭和6年10月1日発行）。初版。
 - 第2巻『モダン流行語辞典』麴町幸二編著、喜多壮一郎（早大教授）監修（実業之日本社、昭和8年1月8日発行）。2版。
 - 『増訂 哲学辞典 全』朝永三十郎（文学博士）編著（東京宝文館、大正8年10月10日発行）。増訂8版。
 - 『最新 市場用語解説 別輯 英米市場用語詳解』中外商業新報社市場部編（森山書店、昭和7年12月7日発行）。再版。
 - 第3巻『外来語辞典』あらかわ そうべゑ編著（富山房、昭和16年6月10日発行）。初版。
 - 第4巻『英語から生れた 現代語辞典』英文大阪毎日学習号編輯局編（大阪出版社、昭和5年9月8日発行）増補11版。
4. 復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小をして収めた。
5. 第4巻巻末に、澤 正宏氏による解題を付した。

近現代日本語辞典選集【モダン語辞典・事典・用語編】

第1巻 目 次

河合醉茗編著：

近代詩用語辞典 大正13年 初版 1~205

山田清三郎、川口浩編著：

プロレタリア文藝辞典 昭和5年 初版 206~421

生田長江編著：

文學新語小辭典 大正6年 第18版 422~545

鵜沼直編著：

モダン語辞典 昭和6年 第45版 546~612

大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編纂：

現代術語辞典 昭和6年 初版 613~717

近代詩用語辭典

河井醉茗編

東京 紅玉堂書店

題 言

最近三四十年の間に日本に於て發達した新しい詩といふ藝術を、縦に考察するばかりでなく、樹木の横断面を目に視るやうに横から觀察しても、何んなにか詩の生活の眞實さが分るだらう。

そこには神祕派あり、耽美派あり、象徴派あり、自然派あり、民衆派あり、詠嘆派あり、古典派あり、浪漫派あり、自由詩派あり、相應じ、相離れ、渾然たる詩界の渦を捲いてゐる。

永久不變なる太陽の下にあつて、人間は生々流轉し止まる處がない。その間、詩に參與するものゝ精神は、最も美しい精神であり、最も純なる精神であり、最も正しい精神である。時代が如何にあらうとも、思想が如何にあらうとも、人間の個性を暗示し、表現するところの詩の言葉の形には偽りが無い。凡てが現はれたものである、優れた人間性の現はれである。

詩には詩の形がある、新しい芽を出してから僅に三四十年しかたゝなくても、その形は時代の人々の胸に相映發しなければ已まない。人間相互が解放され、ばされるほど、詩の形は自由になつてゆくかも知れないが、矢張詩には詩としての獨創を失ふべきものではない。

詩は盛んである、盛んなる人間生々の燃え上る形である。

凡ての人間に詩は潜在す。先づ求めよ。

詩を求むる心から發生して、初めて人間性の目覺めがある。求め得られるだけは求め、尋ね得られるだけは尋ね、探し得られるだけは探し、味ひ得られるだけは味ひ、簡して後に作り得られるだけは作れ。詩は如何なるときにも人生の遺つれである。

湖南平塚砂丘の家にて

大正十三年九月

河井 醉 茗

開 卷 の 始 に

本書の出版に當り、先づ最初に本書に披率したる詩人諸氏に對し、私の專壇をお託

びします。諸氏が勵精刻苦の作品を自由に披抄し、或は註釋し、縦まゝに排列したる

爲め、わが敬愛する諸氏の意に戻る處多からんことを深く恐れます。本書編輯の動機

を諒察し、偏に了解を望みます。

1

本書編輯の用意に就いて特に一言したいのは、本書は分類を立て、後ち、詩句を渉

獵したものでなく、解題にある詩書九十二冊を悉く讀し、そのうちより名句と思はれ

るものを抜き、後ち更に分類したものです。従つて分類の各項目に涉り、或は詩句の

多きものあり、少きものあり、不同を來したる所以です。

近代と題してありますが、明治年間の『荈菜集』を以て起りとする考で、明治三十年以後、大正十年までの詩の中から選みました。明治三十年以前にも好い詩はありましたが割愛しました。また大正年間に於ても、殊に最近頻々と出版される新人の集が無論抄出すべき詩はあると思ひますが、それも打切りました。他日の機会を待つことにします。

×

合集から一つも採用しませんでした。個人の集を重んじて、それからのみ選択しました。尚ほ個人の集とても悉く網羅したわけではなく、幾多の詩集が洩れてなます。手許になかつたのと、探してゐる間に時日が間に合はなかつたのと、それらの不備は編者として残念ですが、大體として有名な詩集は洩らしてゐないつもりです。

×

註は特種のものにばかり簡單に附きました。繁雑な註釋を多く加へるより一句でも多く詩を採りたいと思つた微意に外ならないのです。

註の中に、その詩の題を掲げ、その一節としてあるもの、また題だけを掲げてあるもの、共に一篇の詩の一節を抜いたものです。また題を掲げて、その一篇とあるのは、即ち短い一種の詩の全篇です。

×

註釋の中に、題と本文と併せ讀むような意味のところがあります。例へば「夏の『日ざかり』の印象(一二頁)」といふ註は、『日ざかり』といふ題も含まれてゐます。斯ういふ例は他にもありますから、そのつもりで讀んで頂きたい。

×

童謡、民謡、及び長篇の物語詩といふやうな作からは一切抜きませんでした。それらは自ら別種の用意の下に編輯されるべきだと思ひます。

×

初心者の爲に一言添えますが、本書は『用語辭典』と題してあるので、直ちに詩の用語を本書から採れるように思つたら間違ひです。本書は模範としての詩の言葉を集

何んなるものかといふ参考には本書の如きその一つだらうと思ひます。七五、五七から出發して、自由な文語になり、更に一轉して口語、現代語になつてゐます。僅か三四十年の間にこれだけさまざま新しい形式を試みられた藝術も少いでせう。初心の人達はよく味つてみて、表現の形式もそろそかにすべきでないことを知つてもらひたいのです。

5

形式の参考になるといふことに就いても一言して置きます。西洋の詩論などを見るに可なり詩の形式といふことを重く視てゐますが、日本でも以前の詩歌にはちやんとした形式が具はつてあるのと同じことで、一つは發達の徑路が長かつたからです。現在でも形式があつて内容を盛るのだと説く論者も尠少でありません、これは孰れから云つても同じやうなことで、内容形式共に存在してゐるので、日本の近代詩の形式は

×

めてあるので、單なる用語集とは聊か異つてゐます。最も短い或る一つの言葉ぐらゐは採用される場合もあるでせうが、一句乃至一節を採用することは獨創を尊ぶ詩の上には許されないとだらうと思ひます。されば此の詩集は初心者の爲に何ういふ役に立つかといふに、第一は詩作の暗示を得ます、或るヒントが與へられます、形式上の參考になります。さういふ手引こそ初心者に至要であつて、用語そのまゝの採用に便することとは却て初心者を毒するものだらうと思ひます。詩の表現は極めて自由ですから用語などは、そのをりへの感動に伴つて自ら表現せらるべきものでせう。

4

生 一
 時 二
 青春 七
 歡喜 三三
 魂 三三
 祈 三三
 沈黙 三三
 出現 三三
 夢想 三三
 愛 三三
 苦惱 三三
 信念 三三
 力 三三
 欣求 三三

目次

恩ひ出 三三
 運命 三三
 幻滅 三三
 孤獨 三三
 憂鬱 三三
 享樂 三三
 神秘 三三
 寂寥 三三
 倦怠 三三
 憤激 三三
 恐怖 三三
 悲哀 三三
 罪 三三
 死 三三
 神 三三
 靜寂 三三

空には
 新しい光
 人には
 新しい言葉あれ

—— 啓者 ——

勞働	六
群衆	元
女	元
父母	〇〇
妻子	〇〇
人物	元
友	三五
農人	三七
病	元
肉體	三三
頹	元
都會	元
郊外	三五
田園	三五
食卓	元
旅	元
故郷	元
祭	元

引用詩書解題

爽快	〇〇
平和	〇〇
詩	三五
讀書	元
戀愛	〇〇
太陽	〇〇
月	〇〇
星	〇〇
空	〇〇
雨	元
雪	〇〇
風	〇〇
響	元
夜	〇〇
朝	〇〇
夕	〇〇
士	〇〇
火	〇〇
山	三五
海	元
河	〇〇
林	〇〇
野	〇〇
樹	〇〇
草	〇〇
花	〇〇
果實	元
鳥	元
獸	元
魚	元
蟲	元
生活	元

氏譜の載掲書本

有本	芳水	生田	春月
伊良子	清白	上田	敏
河井	醉茗	蒲原	有明
兒玉	花外	西條	八十
佐藤	惣之助	依藤	春夫
島崎	藤村	白鳥	省吾
大藤	治郎	高村	光太郎
土井	晩翠	野口	米次郎
日夏	歌之介	平木	白星
福田	正夫	堀口	大學
三水	露風	溝口	白羊
百田	宗治	柳澤	健
米澤	帆子	井上	康文

一色	醒川	加藤	介春
北原	白秋	國木	獨歩
相馬	御風	佐藤	清
澤	ゆき子	澤村	胡夷
薄田	泣菫	千家	元麿
竹友	藻風	富田	碎花
萩原	朔太郎	人見	東明
深尾	須磨子	福士	幸次郎
正當	汪洋	前田	林外
水野	葉舟	室生	犀星
山村	暮島	横瀬	夜雨
尾崎	喜八		

(以上五十音順)

生

けふ域はれし日をさもへ、
人は昏からんとしてあらず。
萬物皆みあれど
淨められて最終に生きんがためなり。

(露風)

大きなる自然こそは我が全身の所有なれ
しづかに運る天行の如くわれも歩むべし
(光太郎)

併しながら有且にも眼を開いたからには
刹那も眼を閉ざれば死滅の外はない、
盛りおがって湧きいづるばかりだ。
(有明)

【註】「光明涌出」篇の「われは借す」
一節、つまり生の高調である。われわ
れの生は刹那を活かすことに始まり、
刹那は休まない、瞬刻も眼はつぶつて
はならない、それは普く現する光明で
生んで生んで極まるところがない、そ
の光明に盛りおがれ。

満ちてくる潮のうへに光りはうたふ。
すべての満ちてくる生命をのうへに幸お
れど。
(柳虹)

わたし共にもやがて最後の時が来て
この人生と別れるなら、
願はくば有難うと云つて此の人生に別れ

ませう。

(幸次郎)

【註】「感謝」と題した詩の初めの一節

人間らしき生き方

ただ一つあり、

かなしむ爲に

生きるな。

(大學)

【註】「理情」の一篇。

會てわたくしは過去の爲に、あつたのか

當來もわたくしは子孫の爲に存へるのか

人間らのため生きてゐるのか神のためか

わがためか、かれのためか。(歌之介)

【註】「觀想」の一節。

かすかぎりもしれぬ蟲けらの卵にて

汝が心、

我が心、

とこしへに

かよはねど。

○ 掩蓋の中にある。

緑の海の高まるとき、われは大いなる

【註】大自然の母の胎より生れしもの、

大いなる搖籃なりき。

(露風)

われを上げき、

地と海と

○ まれたる有りがたき一日である。

【註】いかなる日にても、わが爲には恵

(醉者)

かよふなき

とるごびに

おもわれら

生きてあり。

(露風)

【註】「晴れわたる空のもと」の中の句

である。鳥の心と、人の心と、通はな

いが、鳥は鳥として生きる歡び、人は

人として生きる歡び。

○ ただよへる大氣に

まじりて燃^もかる

— 香、

さだかに見えねば

もとより捉えかねて

かたちならぬかたち—。

ませう。

(幸次郎)

【註】「感謝」と題した詩の初めの一節

人間らしき生き方

ただ一つあり、

かなしむ爲に

生きるな。

(大學)

【註】「理情」の一篇。

會てわたくしは過去の爲に、あつたのか

當來もわたくしは子孫の爲に存へるのか

人間らのため生きてゐるのか神のためか

わがためか、かれのためか。(歌之介)

【註】「觀想」の一節。

かすかぎりもしれぬ蟲けらの卵にて

春がみちつちりとふくれてしまつた。

げにげに眺めみかねたせば

子どもかしてもの類の卵にてぎつちり

だ。(朔太郎)

【註】詩は「春の實體」といふのだが、

櫻の花にも、柳の枝にも、明には見え

ないが無数の卵が生きてゐるようと思

はれ、それが空中一ぱいにひるかつて

ゆく春の實體。

○ われは生きんと思はず、

わが心つねに滅びざれば。

(醉者)

○ 心しづかなれば、

道に落ちたる繩屑をひるひ石くれを除け

たたそれのみの一日にてもわれを産く

自由意志と云ふものが實際おつたならば
 我を造らうとする神の前に進み出で、
 人間にしないで草にして下さいと言つた
 ものを。
 (春月)

【註】「人間」の一節。
 黎明！
 まだ暗い空に星がいつぱいだ、
 星は人間の眠る間も夜を過ぎて輝いてゐ
 る。
 世界は、
 いつでも何物かに生きてゐる。
 (正夫)

【註】黎明詩篇」の第一。
 かよわきかよわきながら生命を漲らせ

女娃よ、
 卿は至高至美なる詩そのものなり。
 海よりも廣く力強く躍る生命が
 人間の胸にある。
 蒼空のもとに、日のもとに、
 涼風の中に
 地上の神——人間は立つて海を眺める。
 (省吾)

【註】人間は自然の征服者、ある時は地
 上に立つ神。
 この血の中には
 まだ生れず、滅びざる多くの種子がある
 御身の中に生れ

わが在るは
 かくとあれ。
 (碎花)

【註】「烟」と題した一小篇。
 土の中にありて日を見ざる芽を愛せよ
 言ふ言葉を持たざれど
 激しい思ひに揚ぎ、生きてゐる
 生きな、生きようとする若い芽を愛せよ。
 ○
 この一人の中にひそかに育てられる
 一つの草の芽を、この小さな孤りを「吾」
 を、
 神の断片として宇宙に「ながりありあらしめ
 る

氣遣と光りの世界にあらしめる
 あらゆるものゝ生を
 吾の呼吸のうちに感じ合ふことを
 ああ、吾と偕なる人々と
 いま共に祝禮せしめよ。
 (柳虹)

【註】「思想」の一節。
 數限りもない生殖が
 數限りもない美しい場面に
 鳥や獸や魚や昆蟲によつて行はれる。
 かれらは快活に炎のやうに響き
 脈うつ肉を互にかからんで
 相逢ふ歌をうたふ
 太陽にささげる祈のやうに。
 (省吾)

若し私に我儘が許されてゐたなら、

生

奮るきも
あたらしきも
なぐこの道。

○
【註】新と真理の探求者は、此の安逸、
平靜の誘惑に負けてはならぬ。
懐か調妙な古い歌謡をきくやうな「追
憶」といふ臥床をつくつて置いてくれた
（碎花）

快い眠りをむさぼるために
つげこんで長い歴史と習俗とは
安逸とそして平靜を欲する人間の弱味に

○
私はじつと人生を見送る。
（正夫）

苦しめるさすらひ人よ、
こゝを下り
またのぼる
同じきどはし。

○
【註】女性の優越感。この詩は創造と題
してゐる。
尊きものを生ひこころ。（順子）

あま
我身常なき香に充ち
真珠なす油のしたより
そら天地を戀ふ。

○
あらはれまた失はれてゆく道である。
道は今なない人も、ある人も、凡てが、
【註】詩は途上と題してあるが、この

（露風）

生

生育し、繁茂すべき多くのものが
この血の中に光つてゐる。
（葉舟）

○
人間が人間の
たましひの踏み潰されるところだ。
太陽と月光との道であり
われと君との道であり
むしけらの道でもある。
（厚星）

かくて人間は
果しなく生れ
果しなく死に
果しなく苦しく
いづもさみしく地上の宿に。
（正夫）

○
あるものは人物の胎内に

あるものは見るゐの内臓に
あるものは玉葱の球心に
あるものは風景の中心に。
はぐてりやがおよいでゐる。（朔太郎）

○
人は
彼等自身に
さまつてくることも
雑作なく「人生」の一語に
圓満に、無慾に
解決する術を知つてゐる。
（治郎）

○
さすらひ人よ、
——私は昨日野で逢つた、
——今日も野で逢つた。

見えざる手
見えざる力
信じあたふか、

しかも晝夫は耕し、石工は切る
ああ、常に絶えない深さの底に
いつも魂は動いてゐる。

【註】「生れるまで」の一節、私といふ
のは生れるまでの私である。
そしてその自い手を私の上に載せて下さ
女から男の生れることをお信じなさい。

【註】「生れるまで」の一節。

【註】彼は萬物と共に躍る人である。生
の肯定者。
私は妻がみごもつたと聞いたとき、
(光太郎)

最も激烈な近代人であつて
しかも最も執拗な古代人である。

【註】人間に屈服することはない。
吾々は自然に對して生きるのだ。
(宗治)

吾々の上には空大な空があるばかりだ、

わがいそしみの眞の人生を。(正夫)
【註】生は深く、そのすがたは見えない
けれど――。

ふと
ひとつひとつにうす青き芽を生む
地上の種子をおもふ。
【註】いのは死つ、いのはうまる、
談笑の間にも、刹那にも。

わがいのちよ、わがいのちよ、
燃えやすきマグネツシアのごとく

こぼれたる酒の如く
風の吹く花散の如し。
いこの刹那をも
われ愛し拜まむ。
(省吾)

劇場のやうな
都會の大騒擾のなかにあつて
かづからは煙く

撫のやうな香を、生命の壺から。(碎花)

【註】「自主」の一節。捉らそがたい自

分をみつめる。

お前の爲にもう秘蹟のない地の上に

何故になほほ止まらうと云ふのか？

【註】月が詩人にささやいた言葉だ。
(大學)

母よ、母よ、
惱みたまふな、
魂は立派に二つに別れてゐます。

苦しみたまふな、
身體は安らかに二つに別れてゆきます。
(醉者)

生

人は人ともものおもふ。
鳥は鳥ともものおもひ

○
【註】人間は這つてゐる。
しかもなほあゆむと見るや。
いつまでか暗きさまよひ――
つち近く人は這ひつ

○
燃久の土に我のみなれば。
天職、我と同じき人は
無窮の空に一つあれども、
我と命運ひとしき星は

○
人生の舞臺より引き退くべし。
何事もせずして
一生が凶なる人は

(有明)

(泡鳴)

(自星)

(春月)

時

○
外に人がるゝすべやある。
人をつくりしあめつちの
のがれ出づべきすべはあれど、
人のつくりし淨世より

○
長しとも思ふ命かな。
花の残生を眺むれば
露ふきこぼす朝ぼらけ
千草にわたる空風の

○
「かなしみ」の女木、「よるこび」の男木。
生命の路のもろ側[＊]に攀[＊]ぎよき立て

(獨歩)

(夜雨)

(泣蓮)

11

生

私の妻の胎内に發生しはじめた

或る嚴肅な存在を感じた。

○
そのえたいのわからぬ微妙な生命が
私達の話を静かにじつと耳をすまして
聞いてゐるやうに思はれた。
うかくとしてゐることが恥ぢられた。

(省吾)

○
やがて日ざし乏しき倫敦の朝はあけ
きのふのやうに、ひざし乏しき倫敦の朝
はあけ
生はあまりにおほく
死はあまりに少なれば。

(椿)

○
【註】折から世界戦争の最中で、獨の飛
行機は屢倫敦の空に來襲する。その
脅威には倫敦の人達は何んなに多く死

ぬだらうと思はれるが、實際には死は
あまり少ない。

○
だが汝は愚鈍な木だ、
いくら花が咲いても
鳥が来て啼いても
葉が茂つても
梢[＊]が延びても
汝は愚鈍な木に達ひない。

○
【註】愚鈍な木はたゞ一つの星だけを見
てゐる。

○
人生には凶日とよふものあり
その日には何事もならず
悪しきは變ぜず、よきは悪しくなると哲
人は云ふ。

(幸次郎)

10

時

唯一の眞實であり

唯一の存在であり

すべての始であり

すべての終である

今の時を惜めよ。

光りかがやく掌に

金の佛はおはすなれ。

光りかがやく掌に

はつと思へば佛なし。

光りかがやく掌を

うちかへしてそ日もすがら。

【註】「掌」の一瞥。有か、無か、有に

（白秋）

（大聖）

もあらず、無にもあらず 萬法流轉す。

日のおちぼ、月のしたたり、

うるほせる、誰かおぢはひ、

こぼれたる、誰かひるへる——（有明）

【註】「日のおちぼ」篇の「ひとしく」

の初めの句、日の落穠も、月のしたた

りも、時間のこと、つまり刹那刹那

を意味してゐる。そのせつなを味はひ

捨ふは生のやしなひである。

急ぎ涙を収めて

雄々しく歩しき道の歩みを踏まざるべか

らさ。

太陽は既に傾き初めたり。

【註】幻形より別れて更に歩みを次ぐ。

（篠花）

時

【時】の蠟燭として安らかに燃えしめよ、

燃焼することなく、まして消すこともなく。

（健）

いちどきに

たくさんの窓が

自分の前を

記憶されることもなく過ぎてゆく（治郎）

私は、たつた一人の行方だけを

私はないが

各が、人ともにもまた枯れてゆく

時の行方を考へる。

（治郎）

すべてのものはしりへに失はる。

車窓に過ぎゆく風景の如く

わが尊き窓は永久の宇宙に開かれたり。

（宗治）

あさくさにて夕日をながめることに、

わがこころに

輪かさなりゆく如し。

（厚星）

あゝ過ぎゆくものゝ一切、わが顔を消え

去るものゝ一切、われはそのために嘆か

す、わが靈無の心を生き動くものゝ上に

とさし向ける。

（柳虹）

【註】「過ぎゆくもの」と生。

時計の息はわが息なり。

されど！

針の糸やうな測られたる生命は有つて
ぬない。(駈者)

【註】「存ける時計」の一節。時計をま
とみに見るにはあまりあざやかすぎる
向ふむいてゐる時計、そのまゝでゐて
もよい。

○
柳は黙しあゆみ
あゆみは永遠におそし。(歌之介)

○
私は自分の體から年取つてしかも若まし
い大地の香を出したいと思ひます。
言葉は古いが、私は何處までも「大地の
子供」でありたいと思ひます。(米治郎)

○
空回りの番兵、

鹿はたほる
たびごとに
葵ごふこひに
かへるなり。

○
忘れたはずの日も街き消えぬ。
【註】祭のあと都大路に木の葉が亂れ
散つてゐる。その葉の一つがいつ
ともしもなく消えてなくなると、わ
が忘れないうと思へ日も消えてゆくであ
らう。

○
こそわが
舞ひつ、片空りにやがては失せぬ—さ
その葉の亂れ、ひとつひとつまるびつ、

○
たびごとに
ちとせのはるに
かへるなり。(藤村)

○
昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ。
この命なを離
明日をのみ思ひわづらふ。(藤村) 15

○
【註】「千曲川旅情のうた」の初めの一
節。
さなり、けふのみ、たじ—
この刹那
われは心に自由を得たり。(泡鳴)

○
のやまは枯る

針の糸やうな測られたる生命は有つて
ぬない。(駈者)

【註】「存ける時計」の一節。時計をま
とみに見るにはあまりあざやかすぎる
向ふむいてゐる時計、そのまゝでゐて
もよい。

○
柳は黙しあゆみ
あゆみは永遠におそし。(歌之介)

○
私は自分の體から年取つてしかも若まし
い大地の香を出したいと思ひます。
言葉は古いが、私は何處までも「大地の
子供」でありたいと思ひます。(米治郎)

○
空回りの番兵、

○
好き機ながれて、去にて、歸り來ねば
空しきゆくへ見やるも甲斐なからむ。
(有明)

○
太陽を俣とし時はかる
【註】「日時計」の一篇。
好き機ながれて、去にて、歸り來ねば
空しきゆくへ見やるも甲斐なからむ。
(有明)

○
盤の上、器形のはりがね渡し時はかる、
鑿釜の古びたる日時計よ、
林子平考へき
太陽を俣とし時はかる
【註】「日時計」の一篇。
好き機ながれて、去にて、歸り來ねば
空しきゆくへ見やるも甲斐なからむ。
(有明)

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

○
【註】「時計」
絶えざる歴史の階段を正しく踏む。
夜にも、おまへの足音は
人を死に渡す「時」の計算者、しづかな

春 宵

過去を語らず、なりゆく末をも
 知りて言はざる深き心の
 いかにやいかに、み空のつかさ
 いま現在をあげつらはむかな。(白星)

【註】「大光明に對して」の終りの句で
 ある。空のつかさは神。あげつらふは
 論じること。

破れてたえず新たなる
 自然の穢をのぞみては
 消えにし千世の萬世の
 現象の行方にわれ惑ふ。

【註】「古橋の賦」の一節。
 (御風)

ものは
 うつらひ

(睡亭)

時却の潮としへに
 替するあも波かへる波
 澄きて洗みて未つひに
 たどうたかたのよの跡
 いづれの時かいつの世か
 亂れ騒ぎのなかりけむ。

○
 心周章つる佐保姫が
 旅の日急ぐか、この夕、
 人は夕飯に耽る間を
 花をここゝに散りこぼれ
 惜ましむ哉、春の日の
 快樂も土にかへりけり。
 【註】佐保姫は霞のことであるが、そ
 れから引いて春の女神の意味にも用ゆ
 (泣菫)

たれにかたむ
 わがこころ
 たれにかつむ

青 春

ることが多い。

○
 心こころの春の燈火とうかに
 若き命を照らしみよ。
 (藤村)

○
 晝には晝に遊ぶべし
 夜には夜に遊ぶべし、
 破りはつべき世ならねは
 身は狂ふこそかなしけれ。
 (藤村)

○
 【註】「壯年の歌」の其三の一節。

時

過去を語らず、なりゆく末をも
 知りて言はざる深き心の
 いかにやいかに、み空のつかさ
 いま現在をあげつらはむかな。(白星)

【註】「大光明に對して」の終りの句で
 ある。空のつかさは神。あげつらふは
 論じること。

破れてたえず新たなる
 自然の穢をのぞみては
 消えにし千世の萬世の
 現象の行方にわれ惑ふ。

【註】「古橋の賦」の一節。
 (御風)

ものは
 うつらひ

(大學)

時は
 消ゆる。

風と
 蒸葉と
 影と

吐息と—。

○
 われは見る、
 癡園の奥
 折ふしの音なき花の散りかひ
 風のおゆみ
 靜かなる年後の光に
 去りゆく優しき五月のうしろかけを。

【註】「去りゆく五月の詩」である。
 (露風)

このおもひ。

わかきのちの

あさほらけ

このころのはるの

たのしみよ。

(藤村)

舞の水にどりて古し、

このゆふべ、覆しぬる

舞の水

惜し氣なき遊りどころに。

(有明)

【註】清きもの、新しきものを欣求する

若き心は、舊い底の濁つた激んだ水を

すて去るのである。破壊より革新へ。

つねのごと街をながめて

しせんに感ずるぬくみのやうだ。

やさしく芽ぐみ

春日にとける雪のやうだ。

ああ、このわかやげる思ひこそは

○

日の思ひ出であらう。

十である。何事にも涙ぐましき青春の

18

【註】「思ひ出」の断章六十一篇の第四

(百秋)

れていでつ。

かにかくにわかき身ゆるゑに涙のみあふ

かなしみはいよいよ去らず、

満たせど、

色赤きキエラソオの酒さかづきにあるは

せど、

ナイフ執りフオク執り、女らに言葉かは

なる麗女。

【註】カテジ シードは舞家に働いて

歌へ、歌へ、カテジ シード。(喜八)

お前も若い、お前も花だ。

若い花やいだ春の目が。

胸ふの丘には一日、目が嘗つてゐる、

○

【註】「青春の唄」の一節。

人生は過ぎゆかた。

(露風)

足拍子とるそのひまより

子、

響きこそはやがてその限りも知らぬ足拍

○

【註】「聴めける靈魂」の一節。

こころときめく性の躍動。

(朔太郎)

うれしく

私の上に輝く日は

いつも春の日と

夏の日とだつた。

【註】私は若かつたとき。

○

わが露な胸が初めて君の赤い唇を受け、

君の唇をおしあてられた一瞬時、

わが二十幾年の孤獨の境涯底ふかく秘め

られた黒い鐵櫃は奇しくも黄金の十字の

紋章かがやき出し、感激に眩めく一使徒

がバナナムの河をよらめき足して岸に

還ひあがる如く

わが多端にして光あふるる未来の陸地へ

とわたしはよらめき押し出された。

(幸次郎)

春 宵

【註】「騎士」と題してあるその一節。
 三月の夕となれば
 痛みやすき青春の心はヴェールをかけ
 彼女の幻想を追ひながら
 時ならぬ情熱に狂ふ。
 ○
 人若くして死すべからず、
 をは人の住むことなくして壊さるゝ家に
 も似たり。
 ○
 若きおれらの舞は花束を受取り、
 蓋被の花束を襟に飾り。
 ○
 明日こそは
 面も紅めず、

(犀星)

すぐるにまぎれ空のとほきにあり。
 夏の日なかに青き猫
 かく隠せば手はかゆく、
 毛の動けばわがこころ
 感胃のところに身も熱る。
 ○
 【註】「生の芽生」中の「猶」の一節。
 (白秋)
 あはれ友よ、わかき日の友よ、
 今日もまた街にいでて少女らに面染むと
 も、
 な喘みそ、われはなほわれはなほ心をさ
 なく、
 やはらかき山羊の乳の香のいまも身に失
 せもあへねば。
 (白秋)

21

春 宵

【註】「思ひ出」の断章六十一篇中の第一節。
 六である。少年の日のおもひ出であら
 う。
 ○
 或る一人は或る一人に限つて語るであら
 うと信じてゐたのに、
 若い男でさへあれば誰とでも語り、若い
 女でさへあれば誰とでも語るのぞ、一人
 一人の夢は、すぐごとと一人一人に歸つ
 て行つた。
 (弊者)
 【註】若い男の夢と、若い女の夢とが夢
 の杜に表はれたといふ詩の一節。
 ○
 かゞやかに今日も晴れたる窓に來て鳥は
 なげきぬ。
 (若人よ)

20

うちいで、
 おまひりす眩ゆき園を、
 明日こそは……
 手とり行かまし。
 (白秋)
 【註】「思ひ出」の断章六十一篇の中の
 第五十九。
 ○
 なるほど、君の着物は風變りだね、
 晩年のエルブレンの着物のやうだな、
 それから君の帽子はすてきた、
 ホットマンのとそつくりぢやないか、
 それから君の靴はトラウベルののやうだ
 な。
 ○
 【註】「或る青年詩人に」。
 (春月)
 ああ、かへらざるわかき面はかの落葉の
 面も紅めず、

響歌

稽きものわれら
敬虔の心一圓に捧げまほしく
薄暮の河畔にぬかづく
きみは白馬にうち騎り
痴情の星より憐憐のごとく降りたまへる
山も木も森も野もいま喜悅に顛へたり。
(歌之介)

【註】至上なるもの、白馬の騎士、きみ
は来れり、われら跪坐して仰ぎみると
いふ。「白馬の歌」。

○
心「なんの歡喜ぞ」純自不二にして
遙かなる神に呼吸すれば
地は鬼忙しくわが互斯體を吸收せんとす
かゝるとさ

水枝に来啼く野の鳥のさげびまきけ
響あるものはかならず歌うたへるなり。
(歌之介)

【註】春朝まだき、雨後の朝である。「お
心身等ともに呼吸するや」悲しき鳥よ
と歌つてある。題は「宗教」。

○
輝き出づるもの
精ある限り
光れり。
花咲けるもの
悉くよるこびて
美しき恐怖を含めり。
(惣之助)

○
はいかにせん、
あくかくもその心に優しく自らの輝くを

響歌

汝が胸を抱け。
神のみぞ、若人よ
神のみぞ汝を知しめす。
【註】「病院にて作れる」といふ詩、こ
れで一篇。
山林に自由存す。
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。
【註】獨歩の創造の世界は常に此の自由
へ、自然への欣求から發してゐた。
(獨歩)

○
鳩ちやらやと敬禮し
嗜ふたつあはせたり。

響あはせ、敬禮し、
光りかがやき重なりぬ。
光りかざりたり、たちまちに
白金無垢となりてけるかな。
(白秋)

○
一體にして神と禽獸とを兼ねる人間、
あま人間こそ惠まれし至上至尊のものな
れ。
われにこの日、おのれ人間なるを覺ゆ
ることによりて限りなき歡喜あり。
(碎花)

【註】神と禽獸は懺悔の涙といふのを知
らない、知るはたど人間のみ。

章 歡

○ 淡紫のソラの花束を振つて私の胸や顔を撃つタンブリン、また虚空をわたる音、き春風のフリアート、そして、包み切れぬ大歡喜に身をねらつて歌ふマイオリンの齋奏。
 眠つてゐた私の全意識は俄然として君に目醒め、
 春の海流のやうな君の勢に私の心は勇みはやる。
 【註】ペルリオの名曲「カルナヴァル・ロマン」の感興である。君といふのはその曲を指していふのである。
 ○ また、私は聴き、心に見る。假面をつけた道化者の快譚の笛の音を、

○ カルタレロの急調子をコンマエツチの箏の音を、窓を打ち、壁を打ち、馬車を打ち、人を打つ五彩のつばを。
 【註】これも右のついで羅馬謝肉祭の有様である。コンマエツチは「コンマエツチの丸は石灰を豌豆の大さに煉りたるなり、白きと赤きと雜りたり、中には穀物の粒を石膏泥中に轉して作れるあり、謝肉祭の間は人々互に此の丸を擲つて戯るゝを習とす」(即野詩人に據る)とあるのがそれである。
 ○ 天と地との
 人の世の毎日の贈り物のありがたき。
 いま三月二十七日の夜

章 歡

○ ことひの床の温く
 吾をめぐらるれしとあまれり。
 (ゆき子)
 ○ うたはまし
 鳥よ、魚よ、
 是た
 もるもの心明るきもの。
 ○ わが愛する者
 小窓に避けし若き女子、
 襟に沁る楊の群よ、
 あゝ四月の日、その日の眞晝、
 その一刻こそは戀はしけれ。
 (露風)
 【註】郊外の春、地平はひらけ、緑の丘はまろく。

○ 神は綻がざるに彼等に食を興へたまひ
 新しき自由は生れ、
 太陽と綠草ととの處る所にかがきたり
 (露風)
 【註】「生物の移住」の一節。
 ○ 雪の中に春は來りて
 など啼く、
 松の葉にまじれる櫛の枯葉
 林にさらさらとなるほさびしけれど
 水の小流れの
 やうやう雪とけて
 かすかに音たてゝゆくに擬ひあり。
 (露風)
 【註】「春來る詩」。

毎號懸賞文集あり奮て投稿あ

文章俱樂部

定價一冊十錢一郵稅一冊一錢每月一回發行

●一冊僅に拾錢也 ●定價の至廉絶に莫比無し

本誌は實に本邦出版界唯一の純文章雜誌也。文章を學ばんとする者にとり、最も親切忠實なる伴侶にして、兼ねて文藝入門者の好手引たるの用意を以て、材料を精選し、様式に新意を凝らし、殊にその内容の豊富なるは、百頁よく他の五百頁に匹敵すと「讀賣新聞」が云へるにも非せらる可し。諸家の文話を始めとし、文學者の傳記、文章練習の實驗談、新技巧の研察等の外語、大家に學んで苦の創作を掲げ、更に大懸賞を以て青年諸氏の投稿を募集し、紙面の大半を割いて掲ぐ、又青年文士録の一欄を設け、全國文學青年の名簿を集成するなど、本誌獨得の企て多く、なほ、毎月掲載の記事中本誌の誇りとするものは

●前月文章史 是、最近に現はれたる名文の解釋也

●文章月曆 是、最も新意に成れる季節の研究也

●文章壇小景 是、興味深き逸話にして挿畫頗る豊富

●匿名文解剖 是、精到無比、具體的の文章作法にて描けるもの也

●匿名作繪物語 是、名作の各場景を描けるもの也

SEIBUNDOS ROSEN LIBRARY

典辭語ソダモ

直沼編



堂文誠

發 刊 の 辭

私は書肆藏文學を創りまして以來、殆んど二十年になりましたが、其間貴用書籍の出版、或ひは一般書籍の實用化といふ事に専念して來た者であります。現角人々は書籍を愛玩物視したがる傾向がありますが、今日の時代にあつては知識の源泉たる讀書といふ事は、人として缺く可からざる事項であり、書籍或ひは新聞雑誌の如きものは、米飯と等しく日相生活の必需品であると信するのであります。従つて、大衆の爲の貴用書籍に金箔皮革の裝幀が行はれてゐると云ふ事は、實用以上の贅澤でありませう。是れは拙々奇麗立言辭を弄する如くではあります。又一面の眞理かと思ひます。斯くして従來の書籍から要らざる贅澤と無駄を除き、之を米味噌と等しき日用品たらしめると云ふ意圖は期せずして、私をして此の十錢文庫の刊行を思はしめたのであります。十錢文庫は従來の書籍の中からあらゆる塵飾を除き、しかも美觀を害はず、冗文を排して簡潔に要諦を述べ、之を百數十頁の冊子に纏めたものであります。従つて、本文

— 1 —

昭和五年十二月

この辞典は辞典である一方、それが讀物であることを買つて戴きたい。ナッセズの要
素が如何に多数に纏込まれておようと、辭典としての使命は完れてゐない積りだ。その上、使
用例を多く入れたことは他の同類項の辭書の真似の出来ないところで、つまりぬかりふれたも
のを棄ててゐないが、時だね語の多いのは自慢出来ると思ふ。こんな小さな辭書だが、一三〇
〇程の世界的主語を掲載してゐる。ナッセズ・ウエスト・ユクモアのカタラとしてダッ
ゼン書世の辭書たるを得るであらう。さらば、チエリオ！

序

著 者

昭和五年秋

廣に依て觀者は、完備と時間と精力とを節する事多大なる可きを確信致します。尚幾文庫は
引きつゞき實生活に即したる名著のみを選び、今後幾百冊にても公にする心組みであります故
永久の御愛讀の榮を賜はりたく希望いたします。

誠文堂主

小川 菊松

八六月刊雜誌

明治學子協會 雜誌之實錄 實錄編輯
東京 世界科學報社 月刊 科學之叢書

十大機約出版

大日本實科叢書
名人圖書 大
日本實科叢書 大
醫學圖書 大
日本實科叢書 大
醫學圖書 大
日本實科叢書 大
醫學圖書 大

【5】猶ほ、オヒキ、エトヒ、オとラの部を各と合併してしまつた。この方がア・ア・トリカ、チイトと信じたからである。
 【6】ゾに屬する一團は、ズ、ビ、ブ、ベ、ボの部に入れずりの部に入つた。これも、これ
 がよろしいと信じたからである。

例 凡

【1】この辭書は編輯者の錯誤のため限り、完全な五十音順に配列した。
 【2】横文字を日本假名に移置するには、大體次の規約に従つた。
 a、ア、イ、キ、エ、オ、イ、エ、ア、イ、キ、エ、オ、イ、エ、ア、イ、キ、エ、オとする。
 b、萬國發音標による「行はフ、フ、イ、フ、ア」とし、「行はソ、ソ、イ、ソ、ソ、オとする。
 c、rの音を特に必要とする場合、r、r、rとし、a音の場合ハ、r、rとする。
 d、lの音はシ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シとする。
 e、rの音はビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビとする。
 f、rの音はギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギとする。
 g、rの音はチ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チとする。
 h、rの音はミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミとする。
 i、rの音はニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニとする。
 j、rの音はク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、クとする。

【3】掲載語の標準は無論各々不同、それに、新聞語、ペイス語、活動語、音楽語、それに
 僅かながら社會科學語を配した。猶ほ、掲載したものを多數に――三倍近く――一括も含せ
 だが、何分にも百頁程度の『十鏡文庫』ゆゑこれ以上の範圍には涉り得なかつた。謹言。

次 目

イの部.....
イキの部.....
クの部.....
エ(エ)の部.....
オ(オ)の部.....
カの部.....
キの部.....
ク(ク)の部.....
ケの部.....
コ(コ)の部.....
サの部.....

目 次

(1)

次 目

ノの部 一五

ハの部 一四

ヘの部 一三

ニの部 一三

フの部 一三

マの部 一三

メの部 一三

モの部 一三

ヤの部 一三

ユの部 一三

ヨの部 一三

カの部 一三

キの部 一三

クの部 一三

ケの部 一三

コの部 一三

サの部 一三

シの部 一三

スの部 一三

セの部 一三

ソの部 一三

タの部 一三

チの部 一三

ツの部 一三

テの部 一三

トの部 一三

ナの部 一三

ネの部 一三

ヌの部 一三

フの部 一三

ヘの部 一三

ホの部 一三

マの部 一三

メの部 一三

モの部 一三

ヤの部 一三

ユの部 一三

ヨの部 一三

(3)

次 目

シの部 一三

スの部 一三

セの部 一三

ソの部 一三

タの部 一三

チの部 一三

ツの部 一三

テの部 一三

トの部 一三

ナの部 一三

ネの部 一三

ヌの部 一三

フの部 一三

ヘの部 一三

ホの部 一三

マの部 一三

メの部 一三

モの部 一三

ヤの部 一三

ユの部 一三

ヨの部 一三

(2)

モダン語辭典
 精 沼 直

目 次

ヨの部 一六

ラの部 一七

リの部 一八

ルの部 一九

レの部 二〇

ロの部 二一

ワの部 二二

了の部

アアガス・カメラ Argus Camera 装置 映相装置のこと。普通の遊動的に及びは、原理學學を必要とするものである。機械的に、視角廣、密閉装置に性能がたつたことゝおぼたさるべきである。無類、カメラ類との類似をなし、構造が堅固である。

アウ・ライト Auto Light 装置、電燈のアウ・ライトのこと。また、電影カメラの撮影機に使用するものであるが、「アウ・ライト」の「アウ」の語源は「出でて」に「アウ」の語源は「光」の語源である。今般の「アウ」は「アウ」の人工的目録に照らすことなる、これをこれ人工的装置のことである。

アノ Anò 装置、潮的装置、同様の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

アア AA 装置、潮的装置、同様の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

Art Photo 装置、写真装置のこと。写真装置である。

Art Photo 装置、写真装置のこと。写真装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

Art Photo 装置、写真装置のこと。写真装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

Art Photo 装置、写真装置のこと。写真装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

Art Photo 装置、写真装置のこと。写真装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

Art Photo 装置、写真装置のこと。写真装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。水の流すしきを必要の装置である。

ワールド Worldの略字。譯し「國際連盟」云々。現在「ワグ」
 與に活動する「労働團體」。労働制度の廢止、労働者の生
 活維持等を大に目的とするが、やはり、極端を同じ、
 各各其の志を以て、急進主義 (Urgent wish)。 (急進
 カキキキを以て) を「ワグ」に將つて、W・W・W. とい
 へば、誰々も見る。編輯、ワグヲ經ては、誰を放る
 べきとある。「今日 W・W・W. といへば、」
 「國際連盟」の如く。
ワグ 日々の撰録の標題に、編輯のことを云ふ「ワグ」
 といふことだ。その類。
ワグ 英語。照ひせし「ワグ」といふ語。ちや
 こそ主人の二人を這つたり出遇はすのほとてあつたり、
 「ワグ」でも、新し「ワグ」をいふ。などい
 言語にしばしば用ひられる。
ワグ 英語。原義のこと。短信や對答物の體
 「英譯の「ワグ」は、」また「ワグ」は、
 但し、その場合、「國際」に連するの如くである。

アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の

アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の

アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の
アイリス・システム Iris System 英語。郵便制度之
 譯す。郵便規則、郵便業務の總稱。郵便之類、
 郵便事務を以て、アイリス、郵便之類、又、それ
 類りする仕事のこと。アイリス、郵便之類、
 郵便事務の出来たる郵便、仕事は、アイリス、郵便
 八時に、郵便事務の出来たる郵便、アイリス、郵便
 の八時、午後三時に、郵便事務の出来たる郵便、
 と云ふやうな制度で、郵便のやうな郵便業務、
 アイリス、郵便業務 (郵便規則) 採用して、アイリス、
 郵便業務の出来たる郵便、アイリス、郵便業務の

トヤウイ Morie さそと同じ運動感の上と云
 した。或はこれらで「モア」をその女のだから出た。
 トウイトウ Koviokan W. 女のめ、フイ
 トキ不定形を取らずである。これはマツケの動作
 にかへるトキの必要用語である。
 びく入り 犯捕語。埋入入れの體とは此處行く入つ
 に入る。

ム の 部

トヤウイ Morie さそと同じ運動感の上と云
 した。或はこれらで「モア」をその女のだから出た。
 トウイトウ Koviokan W. 女のめ、フイ
 トキ不定形を取らずである。これはマツケの動作
 にかへるトキの必要用語である。
 びく入り 犯捕語。埋入入れの體とは此處行く入つ
 に入る。

トヤウイ Morie さそと同じ運動感の上と云
 した。或はこれらで「モア」をその女のだから出た。
 トウイトウ Koviokan W. 女のめ、フイ
 トキ不定形を取らずである。これはマツケの動作
 にかへるトキの必要用語である。
 びく入り 犯捕語。埋入入れの體とは此處行く入つ
 に入る。

トヤウイ Morie さそと同じ運動感の上と云
 した。或はこれらで「モア」をその女のだから出た。
 トウイトウ Koviokan W. 女のめ、フイ
 トキ不定形を取らずである。これはマツケの動作
 にかへるトキの必要用語である。
 びく入り 犯捕語。埋入入れの體とは此處行く入つ
 に入る。

ニ の 部

トヤウイ Morie さそと同じ運動感の上と云
 した。或はこれらで「モア」をその女のだから出た。
 トウイトウ Koviokan W. 女のめ、フイ
 トキ不定形を取らずである。これはマツケの動作
 にかへるトキの必要用語である。
 びく入り 犯捕語。埋入入れの體とは此處行く入つ
 に入る。

トヤウイ Morie さそと同じ運動感の上と云
 した。或はこれらで「モア」をその女のだから出た。
 トウイトウ Koviokan W. 女のめ、フイ
 トキ不定形を取らずである。これはマツケの動作
 にかへるトキの必要用語である。
 びく入り 犯捕語。埋入入れの體とは此處行く入つ
 に入る。

解題 澤 正 宏

近現代日本語辞典選集
【モダン語辞典・事典・用語編】

第 2 卷

クロスカルチャー出版

凡 例

1. 本書は『近現代日本語辞典選集』【モダン語辞典・事典・用語編】（全4巻）の第2巻である。
2. 本書は澤 正宏氏所蔵のものを使用した。
3. 本書の底本は下記の通り。

第1巻『近代詩用語辞典』河合醉茗編著（紅玉堂書店、大正13年10月5日発行）。初版。

『プロレタリア文藝辞典』山田清三郎、川口浩編著（白揚社、昭和5年8月25日発行）。初版。

『文學新語小辞典』生田長江編著（新潮社、大正6年5月15日発行）。第18版。

『モダン語辞典』鵜沼直編著（誠文堂、昭和6年2月28日発行）。第45版。

『現代術語辞典』『毎年年鑑』附録、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編纂（大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、昭和6年10月1日発行）。初版。

第2巻『モダン流行語辞典』麴町幸二編著、喜多壮一郎（早大教授）監修（実業之日本社、昭和8年1月8日発行）。2版。

『増訂 哲学辞典 全』朝永三十郎（文学博士）編著（東京宝文館、大正8年10月10日発行）。増訂8版。

『最新 市場用語解説 別輯 英米市場用語詳解』中外商業新報社市場部編（森山書店、昭和7年12月7日発行）。再版。

第3巻『外来語辞典』あらかわ そうべゑ編著（富山房、昭和16年6月10日発行）。初版。

第4巻『英語から生れた 現代語辞典』英文大阪毎日学習号編輯局編（大阪出版社、昭和5年9月8日発行）増補11版。

4. 復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小をして収めた。
5. 第4巻巻末に、澤 正宏氏による解題を付した。

近現代日本語辞典選集【モダン語辞典・事典・用語編】

第2巻 目 次

麴町幸二編著：

モダン流行語辞典 昭和8年 2版 …………… 1～231

朝永三十郎編著：

増訂 哲学辞典 大正8年 増訂8版 …………… 232～516

中外商業新報社市場部編 昭和7年 再版：

最新 市場用語解説 別輯 英米市場用語詳解 …………… 517～730



早大 教授 大 喜多 壯一郎 監修

現代語辞典

つまり、現代は止まる處を知らず、突進するロケットである。

物質の時代が進轉するル、言をたてて、突進するロケットの姿こそ、現代の姿である。

その時代の進歴に従つて、我々の生活は、意志から獨立して、その様式が發展して行く、特に、ラジオ、テレビジョン、キノ、飛行機、飛行船等々の、スピード科學によつて、我々の生活内容は世界的となつて來た。

その表現たる言葉も、秒一秒、新生して、世の中に送り出される。或る言葉はフランス風に、或る言葉はロシア風に、或る言葉はアメリカ風に、

序

(1)

また江戸の名残りの面影をもつた言葉も、多種多様、寧に雑然と、従来の字引を引いても出て来さうにない、所謂モダン語が生れる。

新しい言葉を知ること、**新時代精神**を知ることである。モダン語を知らずして、新時代を解することは出来ない、所謂時代認識の不足を來たす。その意味に於て、本書はあらゆるモダン流行語を集大成して、ここに編輯した。

特に現代は非常時日本である。インフレーション、フアンクシヨ、滿洲事變、新國家の誕生、聯盟問題、幾多の事件が次から次へと起る。その都度モダン語が誕生する。また、それと共に三口時代と云はれる程、エロ、グロ、プロの流行時代である。三口時代と云はれる程、スベイト、スボット、スクリーンの愛好される時代でもある。

(2)

この意味から、特に非常時用語、スボット用語、社會科學用語、映畫用語、ウルトラモダン語に全力をあげた。

尙、附録として、近代人の標準常識として、これ位は是非知つておきたいと思ふ程度のものを附加した。

一切の流用れとあるモダン語を集大成し、適切な説明を付した點は、從來に見ない辭典であると思ふ。著者自身も夙夙たる意氣をもつて、これを編輯した。

しかし、新語は秒一秒誕生する、その間、多少の脱字あるかも知れない、大方の叱正を待つ。

著 者 識

(3)

★ アイウエオ順索引

★

ア	1	イ	23	ウ	33	エ	38	オ	51
カ	60	キ	77	ク	91	ケ	101	コ	107
サ	126	シ	142	ス	170	セ	186	ソ	194
タ	200	チ	212	ツ	218	テ	220	ト	232
ナ	243	ニ	247	ヌ	251	ネ	252	ノ	254
ハ	257	ヒ	281	フ	290	ヘ	313	ホ	319
マ	331	ミ	339	ム	342	メ	344	モ	348
ヤ	355			ユ	357			ヨ	360
ラ	362	リ	368	ル	373	シ	376	ロ	381
ワ	387								

(5)

★ 索引について

★

★ 本字典は引よいことを第一とした。在来の読み訓をわざとさけて、嚴密な假名使ひによらず、發音に従つて編纂した。

- (1) 長音はすべて〔1〕とした。例へばラソヂ・ゾウはラソヂ・ゾー
- (2) 外國語そのものは日本流の發音に従つた。例へばキヤフエーはカンエー。
- (3) 言葉の次の略字〔英〕は英語。〔佛〕はフランス語〔獨〕はドイツ語、〔露〕はロシア語、〔拉〕はラテン語、〔印〕はインド語の略、尙アメリカ語はモダン語として多いが便宜上英語の中に含めた。
- (4) 言葉の配列は長音の場合は、長音なきものとして配列した。例へばトキーはトキとして配列した。
- (5) 英語のV音は一般にヅで現されてゐるが、(例へばVariety ヴァリアエチの如し) 發音通りに行けばバ行音であるから、その項中に入れた。しかし文字はヅ行で現した。さればヅアーバ、ヅイーゼ、ヅエーベ、ヅオーボ。
- (6) 下の文字は發音に従つて、右記の項目に配列した。
キはイ、エはエ、ヲはオ、ヅはズ、ヂはジ、

(4)

千変ノ流行語辭典

目次

モダン流行語

I—446

(6)

【ア】

アイコノクラスム Ichooklasu 英
破壊者はアイコノクラストと云ふ。キリス
教初めの頃、殉教者正等の偶像を寺院に安
置して、その功德を記念した。即ちその偶像の
前に燈火を點し香を焚き崇拜するに至つたが、
後に至つてこの風習を以て異教的であると、排
斥した一派の説き、偶像破壊と云つた。最近
では社會的意義を帯びて、一切の舊い傳統、
正しい認識を妨げる迷信的思想、權威を打破
することを意味する。

アイズ・セーリング Ice sailing 英
冬期凍結した氷上を、ヨットで疾走するス
キュー運動

アイツのこと。
アイズ・ホッケイ Ice hockey 英
冬期氷結した氷上で氷摺りをやりながら
やるホッケイ。一チームは七人で、ルールは略
ホッケイに同じ。試合時間は二十分やつて十五
分休み、再び二十分やる。原則すると三分が至
五分場外に出されることが一寸續つてゐる。
「ホッケイ」参照。

アイダグリエニ・ダグリエニ I. W. D 英
米國に於けるカンザカリスムを奉ずる労働團
體で、Industrial Worker of the World (世
界産業労働者同盟)の頭文字をとつて一體作
斯く呼ばれてゐる。現在の組合員は正期の會
費を納入してゐるものは約三萬人餘であるが、
會員券は約十二萬餘發行されてゐる。歐洲大

アチ

競争参加に絶対反対を主張したため、その幹部は職責を投げられ、勢力を失った。

その發生は一九〇五年、シカゴ市に於て設立された。その構成は(一)團體の單位は地方産業的組合、(二)同一産業の地方産業的組合は悉く全産業的組合に結合される、(三)密接に關係する産業の全國産業的組合は部門的團體に結合される、(四)産業的総部門は總同盟に結合せしめられ、同一の國際的團體の一般成分となる。その運動方法は嚴格的經濟的直接的行動。

アチエイリス ト

理想家、觀念家、理想主義者。

アトル。システム

無制振制度。工場で仕事がない時職工を解雇せず、共存共榮の精神に則つて、その仕事を

の時間率によつて日給を拂ひ、全然仕事のない時でも定給の最低七割は支拂ふ制度。(當然仕事のない時でも定給の最低七割は支拂ふ制度。)

アリス・アクト

映畫用語。映畫で畫面を丸く切り取りながら次第に閉ざること。

アリス・インヒト

映畫用語。映畫。アリス・アクトの反対。

アロニー

反語、あてこすり、厭味、皮肉、すて正面から非難せず諷刺から云つて利目を強(する。川ば

アエク

「同僚」といふ意味のハイカラな氣取つた用語。佛語で「...一般」の意味であるが、これを使ふ日本のモダン人は特に「婦人と同僚

法。佛語で「...一般」の意味であるが、これを使ふ日本のモダン人は特に「婦人と同僚

アクト

アクト・オブ・バウンティ Act of bounty 英 撥用語。ボルトがラインの外に出た時、又は

アの會話に使はれて、こんなこととなる。アクト・オブ・バウンティ「もちホ——モホ——

英 進行遅れ。「あの方の洋服はなんてアクト・オブ・バウンティでせう」

アクト・オブ・アツション Act of action 英 似た格好はアクト・オブ・アクトだと用ひる。

アクト・オブ・デイト Act of day 英 時代遅れ、陳腐、非常世向きの意(例)ば、ぞ

アグニエニ

並樹障、並樹通り。

を捧つが、アグニエニは少しが品だ。アグニエニなどの言葉は「格伴」といふ意味

する「意味」に限つて用ひる。「ステッキ」とか「ソツバク」などの言葉は「格伴」といふ意味

アクト・ライン Act line 英 野球用語。外野。

アクト・フィールド Act field 英 野球用語。外野。しかも塙が下にグレイと急に落ちるのを云ふ。

アクト・ドロップ Act drop 英 野球用語。アクト・カーブ(其項参照)をして

「ナエをついた直球」等と用ひる。野球用語。本塁側の外角を云ふ。アクト・コ

アクト・コナー Act corner 英 野球用語。曲球の一種で、外曲球。

アクト・カーブ Act curve 英 野球用語。曲球の一種で、外曲球。ソ上に位置した時とも用ひられる。

アクト・フィールド Act field 英 野球用語。外野。しかも塙が下にグレイと急に落ちるのを云ふ。アクト・コ

アウフ

あらまし、概要。テニスの外割の線。この問題のアウト・ラインを申しますと……など、ものを説明する場合に用いられる。

アウフヘーベン Antheben 獨

元來現在の場所をすて、一層高き場所に掲げると云ふ意味の言葉で、擡棄、止揚などと譯されてゐる。ヘーゲルの辯證法によれば、宇宙の根柢をなす精神の發展、又從つて歴史の發展は凡そ三つの段階を踏む。即ち先づ自己自身を定立する、然し自己自身を定立し肯定するために自己以外のものを否定し、反定立しなくてはならぬ。従つて自己以外の他の者を豫想する。こゝに自己と自己に對する他者と矛盾の矛盾があり、その對立によつて兩者の結合された一段高き段階が生れる。即ち正反、

四

合の過程をとして精神は發展する。即ち最初二段階が後の段階で結合される關係をアウフヘーベンと呼ぶのである。マルクスがこのヘーゲルの唯心的辯證法を借用して、唯物的辯證法を立て、歴史の發展は生産力と生産關係の矛盾による階級闘争に依つて行はるとした。近頃の用語癖はこのマルクスの意味である。マン・ボイ間に「彼女との戀愛をすてにアウフヘーベンした」等と用ひられる場合もある。最近プロレタリア文學の勃興するに及んで、アウフヘーベンの作家達の中から、急にプロレタリア作家になりました人を嘲笑してかく呼ぶ。即ち上部は赤いが、中流は白い赤大根に等しいからである。

赤大根 (アカダイコン)

繪畫で人體の描寫精確なるも感興乏しく、繪畫風風に真似るとき、之を呼んでアカダイコンだと云ふ。又畫室内の因襲的姿勢に於ける人物描、自然から直寫せざる人物描を指してアカダイコン的な姿勢など云ふ。一般には學校風な、型にはまつた、形式的な等の意味である。

アカアミツク Academy 英

アカアミツクの語源を遡れば、其れはアカアミと名付けらるる一英雄の名をとつた希臘神話のゼウスの一聖林の名であつて、プラトイが其處で講義などをした。此言葉を引いてプラトイの學派を指し、又文學者、科學者、藝術家等の如何なる會にも與へられるやうになつた。それは、繪畫彫刻建築等諸科の教授される美術學校の意味にもなる。歐洲に於ける最初のアカアミイは一三四五年カエニス黨家等の創めたゼウ・ロニエリク會である。巴里にゼント・リニエリク會の出來たのは一三五一年のことである。一六四八年王の保護のもとに組織された美術學校の基礎をなした。今歐洲の重要な都市は大抵美術學校を有つて居る。

アカデ

- アカデロリス (アカー)
- アカデロリスの項参照。
- アカデインク Acting 英
- 俳優の科、演技のこと。
- アカトリス Acetone 英
- 女優。
- アカレメン Agreement 佛

アフロ

英語のアフリカ人と同義。同意、承諾の意味である。外交用語として、一國が他國へ公使大使等を送る時、あらかじめ誰々を送りたいが貴國の都合如何と問合せ、同意を得た上、はじめて任命するので、この返事をアフレンド云ふ。これが一變化されて、「彼女に結婚を申し込んだが、どうもアグレンを興へて呉れない」などと用ひられる。

アクロバット Acrobat 英

ギリシヤ語のアクロバット(爪先で歩くこと)から來たので綱渡りの意。處がこれが轉用されて、體操師をから呼んでゐる。あの男は中々アクロバットだと言へば、中々世遊りの上手な男だ—との意味である。政治上、理論上の變用者とも云ふ。

アグ

アグレート Agribus 英 仲店道、聯合販賣商業街。多くの店が共同で仕入れ販賣にも協定共同してやるもので、小賣商のデパートメントストア(その項参照)の對抗策として、英國に發達した。アンスグアント Ansgant 英 助手、補助のこと。助教はアシスタント、プロフェッサー助教はアシスタント、レクターである。

アシ

アシナシヨンの略。現今はかく略された方が、一般無産運動等の言葉として多く用ひられてゐる。アシナシヨンの項参照。アシナシヨニ主義(—シニヤ) 機東モソロニ主義と殆んど同じ意味に便は

アジ・エロ 英

アジ(その項参照)をアジ(その項参照)の意。エロ感(淫動)する、と云ふ意味でつまりイット(その項参照)百パーセントの魅力あるヤンダといふ意味である。あの女のマジ、エロはたまらない等と用ひる。

アジニシヨン Anisyon 英

煽動(煽)おはる。大衆が飽く不満、切實な要求に即して、大衆に訴へ、其喝を求め大衆を鼓動(煽動)して一定の行動に導かんとする事を云ふ。この役割をする者をアシナスター(煽動者)かゝる時大衆に呼びかける標語をスローガン(合衆普遍略してアジと云ふ。工場にアジを持ち込め—等と用ひられる。

アジニシヨク・ポイント Agitation point 英

ポイント (Anisyon Point) の略である。左列運動で、一つの運動例へば争議等で、その争議を勝利に導く標に、色々な作戦を立て、指令を出して働きかける本部を云ふのであるが、その本部は官憲の壓迫があるため常に移動してゐる場所をくままして、幹部の一二の者しか知らないやうになつてゐる。その移動秘策指令部のこと。

アジト

移風秘密指令部。英語のアジニシヨク。煽動者。アジニシヨンの項参照。

【モ】

モガニボ・モヂ・モ

各々モダン・ガール、モダン・ボーイ、モダン、デ・イ、モダン・ヤマの略。後の二者は前二者と同様現代的な不良老年、不具夫人の意である。

モザイク Mosaic 英

磁子、大理石その他種々の物質の小片を組合せ、或る圖案を作る技藝を總稱して云ふ。フロンチン・モザイクは大理石、寶石等の小片を家具その他の装飾品に嵌入したものである。

モーション

小あたりに着つて見ること。積極的に相手

に對する前にさぐりを入れること。多く魚事の場合にいふ。女にモーションをかけて握られる人が少くない。英語のモーション(Motion)は運動、動作、行動、意欲等の意。

モダニズム Modernism 英

現代式、當世風、近代主義。

もだる

近代型、當世風、モダン振るの意。

モダン Modern 英

近代の、近代人。

モダン・ガール、モダン・ボーイ

近代女性及び男性、新しい女及び男。大抵正の末期から昭和へかけて流行した語で輕薄浮薄、享樂的な若い男女に對する體諷語。元來は眞面目な意味で、内容的に考察すれば近代

モダン・シンゴ

これを漢字を入れて書き換へるとモダン信箋、又名をボリス・サイントといふ。色々のボイス、格好で語る無言の會話。シング・ガールなどが用ひる。

モダン・ダンゴ Modern Dango 英

ダンスの踊りは、今から三十年前世界の片隅のアルゼンチンに生れた、それから紐育、パリの舞がり、今では世界的になつて、社交ダンスの中でも、一番複雑な踊りとして、確ばれてゐる。しかし現在の社交ダンスのダンスは三

モダンズボ

「セーラー・パンツ」のこと、その項参照

もち

勿論の略。簡潔な言ひ廻しからモダンの會話によく使はれる。「君明日遊びに行くか」「もち」といふ風用ひる。

モダン・流し (ーナガシ)

ヴァイオリンやモニカなど近代樂器によつて、カンエなどを流し歩く藝人。

モチゴ

ワルツは元來フランス語の廻るといふ意味
のワオルナから出た音楽で、くるくる廻る曲で
あるが、この踊りがアメリカ合衆國に入つて、
ダイオゴナルワルツ—ボストンワルツ—
二歩連んで三歩目に兩足を揃へる—となり
それから「ボストン—シチーシヨソ」第一
歩で連み、二歩目は揃へて、第三拍手は休むと
いふ風に變つて、左右廻轉とチエソチ（今日で
は第一歩目が大きく、二歩三歩と小さく進む）
が主となつた。現在わが國の社交ダンスとして
のワルツは、みなこのモダンワルツである。ワ
ルツの項参照。

モチ・コリス
モチは勿論のモチ、コリスはオプ・コリスの
コリス、かゝつてこの合の兒がモチ・コリスで、勿論

モットー Motto 英
格言、標語、題目、打倒帝國主義は支那人の
モットーだ等と用ひられる。

モツラ Mōzura 英
藥業、藥徒、或は事件により起るして不定な動
搖し安んずる心的状態にある群衆のこと。各個人
は平素の思慮分別を失ひ、一種ヒステリック
な気分になつて暴行を行ふ。群衆心理によりモ
ツラが容易く集團的に狂暴な行爲を行ふのを
「暴動」といふ。

モツナル Mōzuru 日露
國際革命労働者救援會の略稱。第三イン
ターナショナルに區屬し、革命運動の犠牲者に

モチキ Mochiki 英
「考現照」の項参照。

モチロシオ Mochiroshio 佛
英語の「イ・フレンツ」(My friend)私の友達
の意であるが、モダン用語としてはちろんそ
れを堅苦しむ教室の友として、カフエー
の相構として見なければならぬ。

モニタ Monitor 英
映畫用語。トッキー撮影の爲の録畫技術主任。
トッキー以前の映畫では監督が一切をやつた
が、トッキーの新しい技術の爲には、特にそ
の方面の専門家を必要とするに至り、こゝにモ
ニターが監督の領域に大きく入り込んで来た。

モチア Mochia 英
意匠。藝術上に使れる場合は香料、薬材の
意味。

モチモチ Mochimochi 英
藝術家が表現しやうとする對象は、風景に
しろ人物にして皆モチであるが、特にモチル

モチ

無 憂 華 (普及版) 九條武子夫人著 定價 壹圓 送料 拾錢	歌 集 薰 九條武子夫人著 壹圓 九拾錢 送料 拾錢	素 顔 の ハ リ ウ ッ ド 上山草人氏著 壹圓 五拾錢 送料 八錢	巴 里 の 横 顔 藤田嗣治氏著 壹圓 五拾錢 送料 八錢	良 寛 さ ま 相馬御風氏著 壹圓 五拾錢 送料 八錢	一 茶 さ ん 相馬御風氏著 壹圓 參拾錢 送料 八錢
---	---	---	--	---	---

文學博士朝永三郎編

訂增
哲學辭典
全

東京 寶文館藏版

序

純正哲學及所謂哲學的科學に關する述作日を追ふて盛なるに係らず、其學語を説明せる辭典の著作なきは著者の竊に以て我學海の一大缺陷と信ずる處なり。從來我邦に於て斯學に關する二三の辭典なきに非るも、それは原譯兩語を對照して譯語の標準を示すを目的とせるものか、或は主として教育に關する學語若くは題目を説明するに止まれるものにして未だ嘗て哲學全豹に亘つて廣く學語を説明し、普く斯學研鑽の參考に資せんとする者あらず。著者自ら揣らず、茲に一般に哲學上の學語を説明せる辭典を編ぜらば、全く此缺陷を充さんが爲め也。されど斯の如き辭典の編纂は多大の歲月を費し、博く群書を涉獵して始て完成を期す可きもの。淺學の著者の敢て當るところに非ず。固より本書は專攻學者の師友とな

新學界に重きを爲すに足らざる可し。唯一般研學者に對する津
 從たるを得ば望外の幸なり。且本書は我邦に於ける此種の著作の
 嚆矢なるが故に稿成りて後之を顧れば編輯の體裁に於て又叙説
 の内容並に形式に於て著者自ら嫌焉たらざる所少なしとせず。是
 等は切に讀者の諒恕を乞ふと共に幸に再梓の機あらば嚴に修正
 を加へて不備の點を補はんことを期す。

明治三十七年十二月十七日。

著者 識

再版序

本書を再版に付するに方て通編梓を新むる能はざりしは著者の
 遺憾とする所也。されど初版に於ける誤植は發見し得たる限りは
 之を訂正し、術語の五十音順を顛倒せる局部は改梓し、脱漏の條目
 及び緊要の題目にして記述を洩れたるものは『追補』として卷末
 に添附し、全部を改版せざる範圍内に於て及ぶ限り不備の點を補
 はんことに力めたり。

初版の本書に存する不備の點に就て姉崎正治、紀平正美、桑木嚴翼、
 得能文吉、田靜致等の先輩及同窓諸氏は有益なる忠言を與へられ
 たり。茲に記して其厚意を謝す。

明治三十八年八月二十四日

著者 識

凡例


1. 本書は主として、アイスマンの Wörterbuch der Philosophischen Begriffe und Ausdrücke、ポルトギスの Dictionary of Philosophy and Psychology、及びキルヒホルの Wörterbuch der Philosophischen Gr-
undbegriffe 等を参考とし、一般哲学に関する事項に就ては更に諸家の哲学史及哲學概論を參考せり。他の
特殊の哲學的科學に就ては、倫理學に於ては、シュテューブ、マクニッシュ、ホフマン、メルラン、
の諸家を、心理學に於ては、シュタム、ホフマン、クレーン、グレンツ、グレンツ、メルラン、
著を涉獵する能はざりしを遺憾とす。哲學的科學以外、即ち、生物、物理、生理、精神病等の諸學に關
しては時感察に深し。是等の事項に就てはポルトギスの辭典に最も多し。
1. 學語は著者の創意によらずして専ら我邦の專門家が其著述若くは講演に於て現に使用しつゝあるもの
を採用し、且つ諸學者の異譯を出來得るだけ廣く網羅せんと力めたり。著者の創意に係るものには、特
だ「と譯す可きか」と譯して可ならんか、等の文字を加へ置けり。
1. 人名は出來得るだけ原音に從ふとを力めたり、原音以外を以て廣く世に行はれ居るものは之に從
へるもあり。例へば「*白言*」を「*カハル*」と譯せるが如し。但し如此場合には必ず原音を併記せり。又由世
の學者は多く羅馬の稱呼に從ひ、之に原音を併記せり。而して卷末の索引には是等の異稱を悉く列記し
て讀者の便に供せり。

邦字索引

凡例
點に於ては邦字索引遙かに優れり。故に一の音譯語又は雜語に就て出來得る本け多くのことを知らんと欲せば邦字索引による方便利也。歐字索引のみによる時は、其語の出處の凡てを盡すと絶は言ふとある可し。

邦字術語句及人名索引

邦字術語句及人名索引

	<p>アライチス。 二八五 アライマン。 二八五 アリマン。 二八五 アイルボ。 二八五 アイコシ。 二八五 アイコシ。 二八五 アイコシ。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>	<p>アライマン。 二八五 アライマン。 二八五 アライマン。 二八五</p>
---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

六倫學派。	一〇六九	原因の變類。	一〇六八
頭等。	一〇三三	「原因止むば精具	一〇六八
ヲトシテ學派のヲ	一〇六八	幻覺。	一〇六八
健忘。	一〇六八	幻覺的隱微感覺	一〇六八
ゲリクシクモス。	一〇六八	幻覺。	一〇六八
藝術的想像(構想)	一〇七二	幻覺。	一〇六八
藝術的想像(構想)	一〇七二	元形。	一〇七二
激因。	一〇七三	原罪論。	一〇七三
劇場の空想。	一〇七七	原罪論。	一〇七三
劇場の想像。	一〇七五	原子。	一〇七九
解脫の妄覺。	一〇七七	現示。	一〇九一
外道。	一〇八九	幻視。	一〇九五
「ゲララ」	一〇八八	原始罪業。	一〇九五
「ゲララ」	一〇八八	現象。	一〇九五
幻覺。	一〇八五	現象論。	一〇九五
原因學。	一〇八九	現象論。	一〇九五

功罪。	一〇三五	荒雜。	一〇三五
公義。	一〇三五	功利。	一〇三五
公衆的快樂說。	一〇三五	功利說。	一〇三五
向進的發展法。	一〇六六	功利論者。	一〇六六
向進的聯鎖法。	一〇六六	「古カチミ」學	一〇六六
公正。	一〇六六	呼吸感覺。	一〇六六
更生。	一〇六六	個人差律。	一〇六六
功績。	一〇六六	個人的快樂說。	一〇六六
構造的想像。	一〇六六	「コスモス」	一〇六六
光纖覺。	一〇六六	個性原理。	一〇六六
來代神教。	一〇六六	個性心理學。	一〇六六
肯定念題。	一〇六六	個性の原理。	一〇六六
後天的。	一〇六六	個體觀念。	一〇六六
行動者。	一〇六六	個體發生。	一〇六六
行動。	一〇六六	滑稽。	一〇六六
行動の分類。	一〇六六	コソライニス。	一〇六六
幸福。	一〇六六	コソライニス。	一〇六六
幸福說。	一〇六六	コソライニス。	一〇六六
光明觀。	一〇六六	コソライニス。	一〇六六

現字術語句及人名索引

哲學辭典

文學博士 朝永三十郎 著



アライクス 或は **アライン・ヨハン**。

Alaix (or Alax), Johann.

デンプルクの哲學教授にして、數種の哲學上の著述

あり。(一五六五—一六三二)

『**アリアイン**』 Arianism.

波斯教に於ける惡神或は惡の元理。『**アラト・スト**』
アラト・ストの條を参照せよ。

アールボト・ヨゼフ 或は **ヨージェ**。

Albo, Joseph (or Joes).

猶太の學者にして、イスキラムの業を繼承せし人、
神の存在、キレの律法及び來世の存在を以て猶太

教の根本教理となせり。(一四二八に於て)

アインスハイニツヒ。 Ayns, Heinrich.

獨乙の法學者にして哲學者。初めパリに於て獨乙哲
學史を講じ、次にフランクフルクの哲學教授となり(一
八三四)、次にクランクの法律及び經濟の教授に轉
じ(一八五〇)、又次でライプツヒムの實踐哲學及び
政治學の教授となる(一八五九)。法律及び政治學に
關する著書あり。(一八〇八—一七四)

『**アイオン**』 或は 『**アエيون**』。

希臘、英、佛
Aeon

希臘語の音譯、永恆に存在するものといふ義也、『**ア**

ノスタライク』派の用語にして、最上神より發生し

て、其れと世界若くは人間の中間に立つて(殊に宇

宙創造の時に際して)其間の媒介者たる介在原理若

くは從神者若くは半神の名稱。

アライク

アエビウス

愛他語 佛英 獨
 愛他語とは主他語とも譯す。彼廣義に解すれば凡て他人の善を以て道德上の行為の目的なりとする倫理語を指さし、其所謂善は、快樂若くば幸福と解するも、活動と解するも、其の他如何様に解するも關するところにはあらず。されど、通常は他人の快樂若くば幸福を以て行為の目的と爲す語を指す。廣狹二義共に 阿含經 即ち利己語或は主我語の反對なり。初めて此語を用ひて狹義に於ける愛他語を説きしはコントにして、スペイン亦之れを採用せり。

アイチーシエス Aithiesios (Aithiesios or Aithiesios) 希臘哲學の末期に於ける最銳利なる懷疑論の主唱者なり。生死の年月詳ならず、西紀後第一世紀頃の人なり。

アウグスチヌス アウレリウス Augustinus, Arelinus, 英音オーグスティン (Augustine) 亞非利加、ヌミヂ

アエビウスヨハン Aepij, Sebiji, ムラールの弟子にして宗教改革時代に於ける新教の高僧 (一四九一—一五五三)

アカデミー學派 佛英 獨 Academy, Academie, アラトンの學說を繼承し、若くば繼承せりと稱する學者の總稱なり。アラトンはアラホ市の城外なるアカデミーア (Akademie) の林園中にありしアカデミアム (等しくアカデミアムと稱せり) に於て學を講じ、を以て此名稱起れり。

アカデミー學派には、古、中、新の別あり。古アカデミー學派は主としてアラトンの倫理學を祖述して是れに、ピタゴラス派の數論を結合せしもの(但し、ピタゴラス派の影響を受けしは單に古アカデミー派の學徒のみならずして、アラトロン自身も亦數年に至ては其影響を受けたり。中アカデミー派は、アルクシオス(西紀前三六一—二四一)及びカルネアデス(西紀前二四一—一四一)其創始者にして懷疑論を唱へたり。新アカデミー派は、クリソソムの(西紀前大凡一〇〇

アエビウス

アのタガヌスに生る。其母は熱心なる基督教信者なりしかば、彼は幼時これよりして宗教上の感化を受け、又アラタク及びカルタに於て希臘學、修辭學及び哲學を修めたり。青年の頃に至て基督教に對して懷疑の念を起し、當時行はれし他の宗教及び哲學等によつて安立を得んと欲し、十九歳の頃「ニコライ」宗に入り九年の間之を奉じたりしが、次に轉じて新アカデミー派の懷疑論に就き、次て五朔アラトンの學派の説を奉ぜり。而して此間彼はタガス、カルタ、羅馬等に於て文法及び修辭等を教授し、三八四年遂にミラノの哲學教授となれり。されど、此間彼は壯年の血氣に驅られて素行頗る修まらざりしが、聖アンブロウシウスの説教に動かされて繼然行を改め、三八六年を以て再び基督教に改宗せり。其自欲傳たる「懺悔錄」は即ち當時彼の胸中に於ける衝突煩悶を精微せるもの也。是れよりして、彼は其哲學上の素養と熱誠ある基督教の信仰とを結合して中世羅馬教の理の基礎を定むるに至れり。(三五—三四)

アウグロロエス 或は **アウロロエス** Augustus, Arelinus, 英音オーグスティン (Augustine) 亞非利加、ヌミヂ

アエビウス

年頃の人) アスカロンのアンチオコス(西紀前六八年に歿す)其主なる唱者にして「中アカデミー派」の懷疑論に對する反動として獨斷論に歸し、又、次第に折衷論に傾きたり。此折衷的傾向は其末流に至て漸次盛んとなりて、遂には、アラトン、アリステレウス、シェニオン、エピクテウス、アルクシオス等の思想を混淆して難解極まりたる習合説を立るに至れり。

歴史家によつては「アカデミー學派」を別つて單に古新の二つとし、上學、中、新の兩者を併せて「新アカデミー學派」中に攝する者もあり。下に「アカデミー派」の重なる學頭を列舉して其區別を示す。年中は略して問答式也

新 アカデミー學派
 クラテウス(二三〇—一七〇)
 アルキメデス(一三四—一〇七)
 カルネアデス(一二九—九七)
 フロイシオス(八七—七〇)
 アレクサンドロス(三六—一)

古
 アモニウス(三四—三九)
 クレオン(三三—三九)
 アモニウス(二四—二七)
 アモニウス(二七—二八)
 アモニウス(二七—二八)

然るに「心」といふは、知覚、感情、其の運動に於ては、何となく、
世界に於て、心意識の運動によりて起る快樂或は苦痛を

情緒とせしは此用法を採れる也。

(乙) 次項に出で

たる(乙)の意の情緒即ち感情上の常任の傾向に對し

て、一時的の感情の興衰を情緒といふことあり(次

項を見よ)。

(三) 情緒てふ語も亦二様に用ゐらる。(甲) 非常に強

烈にして到底壓抑する能はざるが如き情緒を指す

ことあり。但し此場合に情緒てふ語は不適當な

るべき也。

(乙) 情緒が一時的の感情の興衰なるに

反して、感情の興衰又は遠傳の結果常任の性

癖若くは、性向とされるものといふ。例へば「怒り上

戸」は憤怒の情緒を有するもの、之に反して一時の

憤怒は情緒也。

(四) 情緒とは、(甲) 情緒若くは(乙) 情緒が一層進歩して

觀念性意識の發達に基いて非常に複雑の性を帯ぶる

道徳的行為の遂行藝術の觀賞等に伴ふもの、如し

情緒を甲の義に解すれば、或は一時の感情の興衰を指

さし、若し乙の義に解すれば常任の性向を指す。

又、情緒と情緒若くは情緒とは其間に截然たる區別

カ

カントイマヌエル。 Kant, Immanuel.

獨乙の哲學者。コニヒンブルグに生れ、終生其

市に住せり。初め「ライプツィヒ」大學に於て、

神學、哲學、數學を學び、一七四六年より五五年

に至るまで家庭教師となり、一七五五年「プロッ

ク」大學の無給講師となり、其職にある

と十五年、此間彼は論理學、物理學、純正哲學、數

理學、倫理學、人類學、地文學、法理學、及び教育

學等を講じ、且つたびは金石學の講義をも爲せり

と傳へらる。當時哲學上に於ては彼は専ら「ライプツ

ィヒ」大學の説を奉じたり。一七七〇年即ち其四

十六才の時初めて論理學及び純正哲學の正教授とな

り、一七九七年即ち其七十二の時に至るまで其職に

ありて、此年去衰の故を以て職を辭し、爾後「マテ

マランゲン」大學より教授として聘せ

られしも皆辭して受けざり。著述家としての彼

の生活は其廿才の時(一七四七年)「活力の眞計定

法論」(Gedanken von der Wahrheit der Bestimmung der

Lebensgröße) 著して處女作を出し、を始めとして

絶えず著作に従事し大小併せて凡四十に上る。而

カ

カ

感性運動的 感覺 Sensory-motorisch

動作てふ語の形容詞として用ゐらる。感性運動的動

作とは感覺に繼いで起れりと思はれたる動作をい

ふ。觀念運動的の條を見よ。

寒 點

あるにあらざりて程度上の差のみ故に「シム

ス」の如きは別に情緒てふ語を用ゐずして、此處に所

謂情緒をも情緒の中に攝せ、唯「粗朴の情緒」(grobsinnlich)

的情緒(即ち此處に謂ふところの情緒なり)、精微

的情緒(即ち此處に謂ふところの情緒)と區別するに止めたる

名稱を設けて便宜上之を區別するに止めたる

尙ほ又、此條に述べたるは皆な比較的嚴密なるの解

釋法に従へるものにして、單に通俗の間に於てのみ

ならず、學者間に於ても是等の術語は頗る散漫なる

意味に用ゐらるること多し。例へば「emotion」てふ

語を廣く「feeling」と同義に用ゐ、又は「passion」てふ

語を「emotion」若くは「Gefühlsbewegung」と同義に用

ゐるが如し。

カントイマヌエル。 Kant, Immanuel.

獨乙の哲學者。コニヒンブルグに生れ、終生其

市に住せり。初め「ライプツィヒ」大學に於て、

神學、哲學、數學を學び、一七四六年より五五年

に至るまで家庭教師となり、一七五五年「プロッ

ク」大學の無給講師となり、其職にある

と十五年、此間彼は論理學、物理學、純正哲學、數

理學、倫理學、人類學、地文學、法理學、及び教育

學等を講じ、且つたびは金石學の講義をも爲せり

と傳へらる。當時哲學上に於ては彼は専ら「ライプツ

ィヒ」大學の説を奉じたり。一七七〇年即ち其四

十六才の時初めて論理學及び純正哲學の正教授とな

り、一七九七年即ち其七十二の時に至るまで其職に

ありて、此年去衰の故を以て職を辭し、爾後「マテ

マランゲン」大學より教授として聘せ

られしも皆辭して受けざり。著述家としての彼

の生活は其廿才の時(一七四七年)「活力の眞計定

法論」(Gedanken von der Wahrheit der Bestimmung der

Lebensgröße) 著して處女作を出し、を始めとして

絶えず著作に従事し大小併せて凡四十に上る。而

カント哲學者の主要なる特徴を總承或は祖述せる哲

學說を指す。カント以後に於て、カントの諸著は「カ

ントイマヌエル。 Kant, Immanuel.

獨乙の哲學者。コニヒンブルグに生れ、終生其

市に住せり。初め「ライプツィヒ」大學に於て、

神學、哲學、數學を學び、一七四六年より五五年

に至るまで家庭教師となり、一七五五年「プロッ

ク」大學の無給講師となり、其職にある

と十五年、此間彼は論理學、物理學、純正哲學、數

理學、倫理學、人類學、地文學、法理學、及び教育

學等を講じ、且つたびは金石學の講義をも爲せり

と傳へらる。當時哲學上に於ては彼は専ら「ライプツ

ィヒ」大學の説を奉じたり。一七七〇年即ち其四

十六才の時初めて論理學及び純正哲學の正教授とな

り、一七九七年即ち其七十二の時に至るまで其職に

ありて、此年去衰の故を以て職を辭し、爾後「マテ

マランゲン」大學より教授として聘せ

られしも皆辭して受けざり。著述家としての彼

の生活は其廿才の時(一七四七年)「活力の眞計定

法論」(Gedanken von der Wahrheit der Bestimmung der

Lebensgröße) 著して處女作を出し、を始めとして

絶えず著作に従事し大小併せて凡四十に上る。而

カント哲學者の主要なる特徴を總承或は祖述せる哲

學說を指す。カント以後に於て、カントの諸著は「カ

ントイマヌエル。 Kant, Immanuel.

獨乙の哲學者。コニヒンブルグに生れ、終生其

市に住せり。初め「ライプツィヒ」大學に於て、

神學、哲學、數學を學び、一七四六年より五五年

に至るまで家庭教師となり、一七五五年「プロッ

ク」大學の無給講師となり、其職にある

と十五年、此間彼は論理學、物理學、純正哲學、數

理學、倫理學、人類學、地文學、法理學、及び教育

學等を講じ、且つたびは金石學の講義をも爲せり

と傳へらる。當時哲學上に於ては彼は専ら「ライプツ

ィヒ」大學の説を奉じたり。一七七〇年即ち其四

十六才の時初めて論理學及び純正哲學の正教授とな

り、一七九七年即ち其七十二の時に至るまで其職に

ありて、此年去衰の故を以て職を辭し、爾後「マテ

マランゲン」大學より教授として聘せ

られしも皆辭して受けざり。著述家としての彼

の生活は其廿才の時(一七四七年)「活力の眞計定

法論」(Gedanken von der Wahrheit der Bestimmung der

Lebensgröße) 著して處女作を出し、を始めとして

絶えず著作に従事し大小併せて凡四十に上る。而

カント哲學者の主要なる特徴を總承或は祖述せる哲

學說を指す。カント以後に於て、カントの諸著は「カ

自己の利害には關係なきに唯々他人の不幸其物を
見て喜ぶといふことが實際あり得べきかといふ問題
也。憤怒、嫉妬等に於て理はるゝ善意は泛關心の善
意にあらざる、何と云へば最等の情緒は自己の利害と
衝突するものに對する反抗、競争等を意味すれば
也）に就ては英國の連業學者間に久し議論ありし
ところ也。ハチンソは泛關心の善意は邪惡の最高
調なりと説き、バトラーも泛關心の殘忍は吾人か
想像し得べき邪僻の至極なるものなりと説きしも、
兩家共に、純潔なる泛關心の善意が實際に可能なる
かに就ては疑を挾みり。即ち、ハチンソは、惡意ある
泛關心の情惡即ち沈着冷靜に（靜に安んずりて）他
人の不幸を喜ぶといふことは殆んど人性に異れるこ
となるが如しといひ、バトラーも亦、憎かも自憎（己が惡徳の眞實に）てふことかあり得べからざるが如く、
毫も競争若くは憤怒てふことを含みずして他人に對
して惡意を懐くといふが如きことはあり得べからざ
ること也と説けり。ペンタムは善意の快樂を以て仁
慈の快樂に相當する圖様として承認せり。

概稱 命題

命題の存続の條を見よ。

(一) 哲學上に於ては、凡て知識中に於ける普汎的の要
素をば廣く概念と稱し、此普汎的要素が個々の事象
よりして意識的に區別され居るや否やを問はず。例
へば、カントの範疇の如き考察的分析によりて格段
の事象より區別されたりと考へられざる場合と雖、
單にそが事物の普汎的の形成原理なりてふ故を以て
概念、悟性概念と稱せらる。
(二) されど、心理學上に於ては、更に其意義を制限し
て、格段の事象を統一して一個の全体たらしむると
この普汎的の要素を、其格段より區別して認識する
を概念作用といひ、其認識されたる普汎を概念とい
ふ。單に普汎的の要素が認識中に存するといふのみに
ては概念といふに足らず。若し普汎的の要素の存する
純なる知覺と雖も概念的といはざるべからざるな
り。赤色を知覺（Percept）するに當つて吾人はそれが
現はるゝ種々の瞬間を通じて同一なりとして之を認
む。されど、赤色を概念（Concept）せんと欲せば、

概念(一) 概念作用(二)

獨 Engelhardt, Begriff
英 Concept, Conception

中の主要なる特徴は下の諸點也。
(一) 批判的方法、即ち、意識中に於ける先天要素と
發見せられために理性の批判をなすこと。而し
(二) 認識能力には先天形式を具有せりとなすこと。
(三) 前項の結果として現象界と本質界との對出を立
つること。即ち、現象界は、主觀を待つて、主
觀に對して現はるゝ事物の相にして、上述の先
天形式の適用され得べき圏域、本質界は、主觀
を待たずして、主觀を離れて存する物自体にし
て、先天形式の適用され得ざる圏域也。從つ
(四) 此本質界は認識の對象にあらずして不可知の名
ること。從つて、
(五) 超經驗的の對象（例へば神、意志の自由、靈魂
の不滅等、即ち理性概念（其條參照）は認識の
領域に於ては所理する能はず、換言すれば是等
の對象を認識によつて所理するは認識の權能を
踰越せるものなりとして、道徳的生活即ち實踐

他人に苦痛若くは不幸を與へんとする、或は他人の
苦痛若くは不幸を喜ぶ公性向をいふ。 善意の性質
及び泛關心的（泛利害的）善意の可能（即ち、他人の幸
福と自己の幸福と衝突する場合に於ては自己の利害
のために他人の不幸を喜ぶことはあり得べし）、惡
意の性質

獨 Engelhardt, Begriff
英 Concept, Conception

獨 Engelhardt, Begriff
英 Concept, Conception

獨 Engelhardt, Begriff
英 Concept, Conception

獨 Engelhardt, Begriff
英 Concept, Conception

ガリガレ

置に其れ本けに留まるべからず、必ず赤色の一般の性質と其落段の現れとを區別するを要するた。昔は之が統一する階段に反對して把捉されるべからず、而して此作用は言語の助を借るにあらざれば困難なり。如何となれば吾人若し喜沢なるものを心像として意識中に現はし若くは保留せんと欲せば到底或真象的の事物の心像に由らざるべからず、(純粹心像)而かも若し其普遍性が統一せる個々の象其物の心像を借るとせば其心像は其普遍性を欠損するの恐れあり。然るに言語は大に此心像の格段化を拒む効力あるものなり。此點に就ては概念の條を參照するを要す。

概念的科學—對象的科學

論證の條を見よ。

概念論

唯名論—實念論の條を見よ。

ガッセンツドプツス(或はガッセンツェイ)

Galton (G. Galton), Brito.

佛蘭西の哲學者。歴史家、博物學者、數理學者、天文學者、論理學者、希臘語學者、神學者、形而上學者、及び

批評家を兼ね、當時最該博なる學者として有名なりし人也。他國に於けるベトナムの第一の遺蕃者にして、又ガリノオ、アラカルト、ケンブル、ホグズ等と親交あり、親しく書信を往復して學術上の議論を上下したりき。(一五九二—一六五五)

ガリア主義、ガリア人主義

「ガルトモントクニクス」の條を見よ。

『ガリカニクス』(種)『ガリカニクス』

「ガルトモントクニクス」の條を見よ。

ガルトツピ(或はガルトツピー)パスク

Galighi or Galipi, Pasquale.

以本利の哲學者。一八三二年、ナポリ大學の論理學及び形而上學の教授となる。(一七七〇—一八四六)

ガレイン、クアラチオス

Galen (Galenus or Galen), Claudius (or Claudiu).

有名なる希臘の醫學者にして哲學者。アラトーン及びペリパトス學派の學を修め、哲學、論理學、醫學等に關する著書あり。(一三〇—約二一〇)

ガニス、エヂュアード。 Gais, Eduard.

ゴランゲン及びハイデルベルグに於て法律を學ぶ。ベルリンに於てヘーケルと親交を結び又其學說の遺著となる。一八二〇年、ベルリン大學に於て法律學を講じ、一八二五年より其正教授となる。ヘーケルの觀念を基布するは大に興つて方あり。(一七一八—一八三九)

含有、含蓄

内包と同じ。

含有、含蓄

總體及び内包の條を見よ。

含有哲學、含蓄哲學

内在哲學の條を見よ。

ガシ

ガシ

解題 澤 正 宏

近現代日本語辞典選集
【モダン語辞典・事典・用語編】

第 3 卷

クロスカルチャー出版

凡 例

1. 本書は『近現代日本語辞典選集』【モダン語辞典・事典・用語編】(全4巻)の第3巻である。
2. 本書は澤 正宏氏所蔵のものを使用した。
3. 本書の底本は下記の通り。
 - 第1巻『近代詩用語辞典』河合醉茗編著(紅玉堂書店、大正13年10月5日発行)。初版。
『プロレタリア文藝辞典』山田清三郎、川口浩編著(白揚社、昭和5年8月25日発行)。初版。
『文學新語小辞典』生田長江編著(新潮社、大正6年5月15日発行)。第18版。
『モダン語辞典』鶴沼直編著(誠文堂、昭和6年2月28日発行)。第45版。
『現代術語辞典』『毎日年鑑』附録、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編纂(大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、昭和6年10月1日発行)。初版。
 - 第2巻『モダン流行語辞典』麴町幸二編著、喜多壮一郎(早大教授)監修(実業之日本社、昭和8年1月8日発行)。2版。
『増訂 哲学辞典 全』朝永三十郎(文学博士)編著(東京宝文館、大正8年10月10日発行)。増訂8版。
『最新 市場用語解説 別輯 英米市場用語詳解』中外商業新報社市場部編(森山書店、昭和7年12月7日発行)。再版。
 - 第3巻『外来語辞典』あらかわ そうべゑ編著(富山房、昭和16年6月10日発行)。初版。
 - 第4巻『英語から生れた 現代語辞典』英文大阪毎日学習号編輯局編(大阪出版社、昭和5年9月8日発行)増補11版。
4. 復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小をして収めた。
5. 第4巻巻末に、澤 正宏氏による解題を付した。

近現代日本語辞典選集【モダン語辞典・事典・用語編】

第3巻 目 次

あらかわ そうべゑ編著：

外来語辞典 昭和16年 初版 1～619

外來語辭典

あらかわ そうへん

紀元 2601
(1941)

富山房發行

紹介

昨年春の通信に、*轆轤落落幾星霜*、あけても暮れても外來語外來語で、書きためたもの十萬枚といふ意味が洩らされてゐたが、それがいよいよ精解つきの辭書になつて世に出る。福島——兵庫——上海——北鮮——柳里と居所の轉轉する間に、不動であつたものは君の道榮三昧、外來語調査であつた。先頃 Arnold Bennett の *How to Live on 24 Hours a Day* を教室で讀みながら、第七章の“Concentration”強調に至つて、多情多感の自分を憐れに思つてゐた時、君のこの結晶に觸れて、“Concentration”のモデルここにありと感激した次第である。田中道麿・鈴木胤・上田萬年と言葉の學燈かがやく尾張の、言葉いぢりの同志として、一日の先輩として、今この精華を見ることが、私の歡喜にたへないところである。

昭和六年の「日本語となつた英語」改訂版は「1931年に於ける我國外來語の總記録」と割り書きが附けられてゐるが、今度は正に「二千六百一年に於ける大和民族の包攝してゐる外來語の精解總記録決定版」といふところであらう。よくもこんなに集めたもの。そして、専門學術書・各種辭典・文學作品・新聞雜誌等、一一出典が紹介されてゐるに至つて、その博覽透徹の根氣に驚かざるを得ない。かうまで出典を示されると、外國語の勉強をした人間は、とかく實際以上に外來語の數を多く見積る、といふ私のかねての邪推が全くくつがへされる。本書の藏めてゐる外國語は、一つとして荒川君が主觀的に取り入れたものはな

同著者による——

日本語となつた英語……………(1931. 研究社)

外來語學序說……………(1932. 自家版)

とくご とくじ せいさく ろん…(1941. 自家版)

い、従て日本人は何とまア、よくいへば包攝力が大きいことよ、わるくいへば新らしもの食ひであることよの、感を一よいよ深くする次第である。

日本人のこの風尚に對して、之に油をそそぐべし、それによつて日本語の國際性は擴大するといふのが、「外来語學序説」其他新聞雜誌に發表された荒川君の態度であるらしい。それには反對する旨を、私はかねて公明的にも私信上でも表明してゐる。だが本書はさういふ文化政策・國語政策・乃至言語理論とは關係なしに、事實の解明として至れり盡せりのもので、そこに本書の奪ふべからざる生命が凝存する。「日本語となつた英語」が初め私費で出版され、後に研究社で發行された時、之は何の爲の書物だらうかと、その利用價値を疑ふ人が多かつた。故岡倉先生・新村先生・市河先生・森正俊氏等、多數の言語文化の先輩が應援されたにも拘らず、その書物の存在理由が十分に認められなかつた。併しその芽生えが今や此の大辭書に成長して見ると、もはや功利主義的にもその價値に敬服せざるを得なくなつた。

後奈良天皇の享祿三年（紀元二千百九十年）ポルトガルの商船が始めて豊後の濱に來て以來、年と共に接觸の度を増して來て西洋諸民族から、われらの先人が異國文物を取り入れて愈らなかつたおかげで、日本は今日の世界性を築き上げることが出来た。異國語句が取り入れられたのは自然のことわりで、それが意外に多いことをわれわれは歴史的必然と認めなければならぬ。今われわれが紀元二千六百年を祝ふにあつて、この意味深い外来語句の總覽を試みることは、大和民族前進の爲の回顧として其

の意義頗る重大である。心ある者は皆之を試みたいと希望が、つらに誰も取てなし得なかつた。それを荒川君がつらに斷行した。この外来語辭典は、その意味に於て昭代の特筆事である。併しそれは一日にして成るわけのものではない。實に荒川君の不撓不屈十餘年の結實である。故に、かりにこの書が缺點だらけであつたとしても、荒川君の努力に敬意を表し、この書物の出来るまでに援助を惜しまなかつた諸家、そしてつらに上梓を取行された富山房主坂本守正氏に、帝國文運の名に於て謝意を表すことを、微賤をかへり見ず、取て冒頭を取る者、

石 黒 魯 平

昭和十六年二月末日

序

ゲーテの言葉に „Die Gewalt einer Sprache ist nicht, dass sie das Fremde abweist, sondern dass sie es verschlingt“ (一國語の強味は外来分子を排斥することに非ずしてそれを攝取する事にある) とあるが、これは國語のみならず國民についても云へる事である。殊に日本語及び日本國民は昔より外國の言語及び思想を吸収して今日に至つて居るのであり、よかれあしかれ、外國の影響の大きな事は何人も否めない事實である。

自分は夙に國語に及ぼした外國語の影響に興味を持ち、昭和三年 *English Influence on Japanese* なる論文を發表して、日本語に這入つた英語約 1,400 語について論じたが、それが偶々若き學生荒川惣兵衛君に ‘影響’ を與へ、昭和六年に君は「日本語となつた英語」(1931 年に於ける我國外来語の總記録) なる辭書を出版され、約五千の語数を網羅された。この辭書は H. L. Mencken の大著 *The American Language* (1936 第四版) の中にも引用されて居るが、實際同種の辭書のうちでは白眉と稱しても過言ではない。たゞ當時自分は此辭書を評して、「語の意義の説明を與へただけでその用法と年代とを例證すべき文例がないのが物足りない。出来れば文献から集めた引用文を加へて欲しい」といふやうな、隙を得て蜀を望む注文を附け加へて置いた。ところが熱心にして倦むことを知らぬ著者はその後十年の間更に外来語の研究に精進され、語彙

六七萬、引用若くは出典約百萬を蒐集し、その中から語彙一萬、引用出典約五六萬を撰んで本書を完成された。それがためには古今の文献を渉獵し、それこそ萬巻の書を稱かれた事であらう。一人の仕事としては誠に驚嘆に値することである。

固より此辭書は其性質上、明治以前及び以後に於て夥しく外國から流入した言葉——多くは一時的に輸入されて十分に國語の中に同化されない言葉——の記録であるに過ぎないが、日本語の特殊辭典としてこのやうに完全に近いものはまだ公にされた事がない。その意味に於て日本の言語文化史上に貴重な資料を與へるのであると謂へよう。

自分が時と力の足りない爲めに十分に没頭することの出来なかつた仕事か、直接の教へ兒ではなくとも、熱心な後進によつてこのやうに立派に成遂げられた事は甚だ愉快であり、推奨の言葉を書くことも喜んでお引受けした次第である。

今や時勢は外来の勢力に對して極度の反撥を示し、外来語の如きも悉く之を驅逐せんとする風潮が一部に見られるが、しかし伸び行く帝國の發展に伴ひ、他國民他國語との交渉が繁くなればなる程、外来語の數の殖えるのは阻止し難い勢である。その中で不必要なものは自ら姿を消し必要なものが残る事は本辭書のベージを繰りひろげてても察せられることであらう。最も善き國語は最も純粹な國語ではなくして、あらゆる場合に最も適確に我々の思想を表現して傳達する國語である。その爲に外来語を使用する必要のある時は何も躊躇するには及ばない。よ

り善き代用語の見付かる迄は、又は見付からない場合は、
 外來語を採つてこれを我が物として驅使すべきであり、こ
 れが我國語の又我國民の特色である。

さは云へ今日迄外國語を無批評に取入れた傾向は今後
 は是正されるであらう。國語界も今一大轉換期に直面し
 て居る。この時にこの辭書が現はれて今日迄の我國外來
 語の最も信頼すべき總記録を提供された事は最も有意義
 な事であり、學界への一大奇蹟であると思ふ。著者に對し
 ては尙續いて此方面への注意を怠らず、増補に増補を重
 ねて更に完成の域に進まれるやう熱望する次第である。

昭和十六年二月

市 河 三 喜

序

外來語は、祖先が、外來文化を如何に攝取同化したかを
 示す言語的證據であつて、正に民族の物心両面生活を物語
 る偽無き繪卷でさへもある。而も言語は、かういふ點では、
 實に刻銘な、忠實な、素樸なものであつて、個人的天才の
 所産である文學を若しも大人の口供に比較するならば、言
 語は、子供の口供の如くに天真であり、真正直であり、吾
 々の好むと好まざるところに關せず、たゞ事實を如實に呈露
 して偽り匿すところが無いから、遠く、形なき過去の生活
 へまで溯つて恐るべき效果ある長距離寫真だ。これに由て、
 國民文化史のあらゆる論述が、最も具體的に、正確に、實
 感させられることが出来る所のものである。

外來語の研究は、ひとり語學としての興味ばかりでは
 なく、實に以上のような見地から、又特殊な興味があるもの
 である。たゞその事業が至難中の難事であつて、當代の知
 識を網羅するにあらざる限り、さうさう容易く完成せら
 れることではないと考へられてゐた所である。

然るに、荒川惣兵衛氏は十年前、「日本語となつた英語」
 を世に送られて、見事にも、五千語の歐洲外來語の語原
 を、簡明・的確に説破されたのは、學界の賞讃、今尙吾々
 の耳目に新たなる所である。爾來同氏は一層その仕事に
 傾倒されて、不屈・不撓な涉獵が繼續され、珍本・稀圖書お
 よび専門のむづかしい本のほか、二、三萬に昇る文獻を博
 くあさつて、語數六、七萬、引用百萬の中から、この度約一

萬語を精選し、附するに引用五六萬を以てせられ、約一千二百ページに登る浩大な大著を完成されたことは、全く超人的な大事業といふべく、吾等の讃歎を惜まざるところ、眞に學界の慶事である。

勿論この種の仕事は、その性質上、完全は期しがたい。一個人の獨力を以てして、限りある歲月の間に、既にわからなくなつてしまつた過去の闇の中から、ふと紛れ入つて久しい數多の外來語の語原を探し求めるといふことは、たゞ一語にも幾年を費すことがあるのが常であるから、これが完全な捷功は神力ならで達成しがたいことであるといはなければならぬ。であるから、著者は恐らく、此を以て、尙完しとはせず、隨時増補し、永く攷究の努力を絶たれないであらう。吾々は、この人を得て安んじて日本外來語辭典の難業を御任せしたい。又それが出来ると信じる故に、尙々向後の増修を祈つて止まないものである。

願れば、三十餘年前、國語研究室で着手された「日本外來語辭典」の原稿整理を、小倉進平氏から引き繼いで、更にそれを言語學研究室の故前田太郎氏へ引き繼いだ経験がある。著者は上田・高楠・白鳥・金澤・村上の諸先生・諸碩學であつたが、語數・頁數、到底今日のこの大著に比較すると問題にもならないものだつた。併し、さういふ縁故からでもあらうか、序文を著者から徴せられたのである。誠に光榮であるが、同時に根柢たらざるを得ない。私としては、パリカソンの語原と、若干の蝦夷語の経験しか無いのである。たゞパリカソンの一語を探りあてるだけでも、幾百種の文獻と、二年の歲月を無駄にかけた想ひ出がある。而も、出来上つた辭書の中に占めた分量といへば、僅

々三行に過ぎなかつたのである。今この大著の成ることを聞くと、乏しいながらに國學に身を埋むるもの、心からなる慶賀の情の胸いつぱいなるものを覚えざるを得ないわけがある。敢て、不敏を顧みず、喜んで一言讃辭を呈して序文に替へる所以である。

昭和十六年三月十三日

金田一 京助

序

我が國における國語辭典の編纂は、その原理と方式とにおいて、泰西のそれと比較し遜色おぼしく、したがつて、學的價値において、かくるところがすくなくない。たとへば、オックスフォード大辭典や、シカゴ大學から刊行中のアマリカ語大辭典と、我が國における凡百の辭典とを比較してみるならば、たゞに量のみならず質的に、非常な軒差の存することは一見して了知することができよう。しかし泰西におけるこの種の辭典も、多大の年月と努力、經費により、多數の學者の献身的協力によつて完成したものであるが、日本としても、國語の徹底的研究と普及のためには、この種辭典の編纂が絶対不可欠のことであり、萬難を排して努力し、實行さるべきである。この目的達成の手段は種々あるのであるが、歴史的原理にもとづき、語學的に組織された各種の特殊辭典をひとまづ完成し、それを集大成するも一方法である。この方法によれば各専門の仕事が適當に分擔されるので事業は比較的容易にすゝめられる。この意味に於て今回荒川兄の編著になる外來語辭典は、その編纂の方式と原理において模範的なものであり、學的價値の大なることいふまでもない。荒川兄は‘外來語學序説’その他の著述によつて、すでに含名あり、今回の編著まさにその人を得たりといふべきである。

こゝにあつたるところの語彙は、ほとんどすべて音譯語に屬するものであつて、外來語としての特徴を十分に保存

するものであるが、ひろい意味においての外來語は、これ以外にも無數に存するのであつて、國語史、文化史、歴史のかわからず、翻譯語にして國語に馴化したものなどは根本的に研究検討する必要がある。とにかく本辭典によつて、彼我文化交流の關係が、萬般にわたつて歴史的に着眼せられ、その端緒をうるにいたることは、學界の慶事といふべきである。この種貴重な研究に理解をかき、淺薄なる時流に阿附迎合する徒輩のすくなからざるときにあたり、斯道に對する操守かたぐ、精進もつてこの雄篇をなした君が國土的風格を敬愛するものである。ねがはくは、將來ますます勉勵、もつて斯業の大成を期せられんことを。一言もつて序となす。

昭和十六年二月

福井市外 丸山

齋 藤 静

序

荒川君が外来語の研究に精進されてから、すでに少からぬ歳月を費され、その間「外来語學序説」を著し、或は外来語に関する雑誌を發行して、わが國語學に資益するところが少なくなかつた。もつとも二三の學者から外来語に関する研究として發表された論文や小冊子もあらはれて居るが、荒川君の研究の規模雄大にして範圍の廣汎なるに比すべくもないのである。一體外来語と外國語との限界を明にすることは、すこぶる困難な問題で、自然その範圍も人によつて異なるのに止むを得ないが、荒川君はこの點についてきはめて周到な用意の下に取捨し、外来語の本質を明にされて居ることは、まことに多とするところである。わが國語學において語源論は他に出して甚しく連れて居るので、日本語の中をどれだけの外来語が含まれて居るかは、いまだ明瞭になつて居ないが、今後この研究が進むにつれて、これまで和語として怪しまれぬもので、實は外来語であることが發見される場合も多々あるであらう。又、外来語として慣用して居りながら、そのいつれの國語からいかなる逕路をたどつてわが國に輸入されたものか、輸入されてからいかに國語化されたものかも明になつておかないものが多いが、これを究明することがわが國語學上重要な問題であらねばならぬ。

荒川君は多年各方面からひろく外来語に関する研究を進め、これを總合してこの度外来語辭典を編纂されたこと

は、わが國語學のためまことに慶賀に堪へない。今これを見るに收載の語數もすこぶる豊富にして、その各々については原語を注し、わが國においてすでにこれを使用して居るものの出典を示し、さらに的確なる譯語と説明を掲げてあるので、これによつて外来語に對するもつとも正確な知識を採求することが出来るのである。現在外来語の辭典として學界に重きをなして居るのはハインゼの手になるものであるが、荒川君の辭典はこれと肩をならべてはづかしからぬまことに立派なもので、かやうな辭典の出現するに至つたことは、わが學界の誇として欣快に堪へないところである。こゝに一言祝意をかねて所懐の一端を陳べ、序に代へる。

昭和十六年春

保 科 孝 一

序

故岡倉由三郎先生から荒川君の處女出版 *Japanized English* の寄贈を受けたのは既に十年も前の事であった。この書は同君の自費出版であったが、其後間もなく「日本語となつた英語」といふ和名をもつて訂正増補版が研究社から出た。私はその校正刷を拜見し一の序文を書くの光榮を與へられた。其後荒川君は「外來語學序説」なる單行本を出版し、また榎垣實君・重久徳太郎君等と共に「外來語研究」なる雜誌をも刊行せられた。上海に教鞭をとつてゐる間に、英語の支那語に及ぼした影響や、日本語になつた近代支那語の研究に力を注ぐ一方、今回出版の辭典の資料蒐集に着手せられたのであるが、事變勃發後間もなく歸朝、爾來この事業に専念してゐられたのである。

私が荒川君の研究史を茲に略述した所以は、之を私自身の興味中心が轉々として變つてゆく事に對照して、同君の外來語精進に對する尊敬の念が一層深められるからである。私も外來語研究に興味をもつた事がある。しかしそれは、日本語の音聲學に對する私の關心や、淨土眞宗に對するそれやと同様に、過去のものとなつてしまつた。趣味が廣いといへば立派に聞こえるが、それは何事に對しても持統的につき込んだ研究が出来ない事を意味する。

輸入語の研究は日本文化史の一部門として重い地位を有する。今日動もすれば日本固有文化なるもの的重要性を強調するのあまり、外國文化のそれに及ぼした影響を輕

視し若くは閑却せんとする傾向がある。斯る誤りを是正する意味からも私は荒川君の新著の出版を祝福するものである。

昭和十六年三月

森 正 俊

序

“外国語句の移入は、自國の智識生活の擴大であり、感情生活の伸張でもある。”(岡倉由三郎)

本書は、わが古今の文献無慮2-3萬巻、300萬ペーヂ以上をけみし(文献目録参照)、それよりあつめた外来語數約6-7萬、引用約100萬以上、のなから、語數約1萬、引用約5-6萬('passim'を考慮にいれて)、をセレクトし、(ざつと十數倍の材料のなからセレクトし)、それに、内外古今の辭書類等を参照して、原語と解説とを附してなつたものである。

本書をへんさんするにあつておこした念願は、ペーヂ數に制限があつたためもあり、外来語ゾロバン、すなはち、國語としておしもおされもせぬていの外来語を、なるべくもれなくおほくあつめ、その輸入年代をほゞしめしうる文献を附した、言語學的にも國語史的にもオーソドックスの外来語辭典をつくりたいといふ、かなりアマビツヤスなものであつた。したがつて、ゾオカビユラリーの嚴選(この結果、まじめな専門語かおほくなる傾向がいちじるしくなつた)と豊富(本書においてはじめて採録された語もすくなくはない)、原語の本當のアイデントライフイン(本書においてはじめて原語の發見されたもの、是正されたもの、も相當の數にのぼつてゐるつもりである)、解説の簡明親切、引用文献の明示、は本書へんさんの根本方針であつた。ことに引用文献は、一小部分をのぞくほかはことごとく、在來の外来語辭典、國語辭典、乃至百科辭典類のどれにもいさひみられないものであつて、もつて本書の生命とする

ところである。(引用文の原典でなくともいふべきは、その「註釋」が「大辞書」も「外來語」も「一語」の注釈は、凡例にもはつてあるとほり、外來語は研究のほかにあり、「日本外來語」かくて國語の語源學乃至辭典へんさんにとつても貢獻するところがあつたら、著者のよるところはこれにまさるものはない。

本書の母胎をなしてゐるところのしどが、實は、未完成の途上にあり、したがつて本書も未成品たることをまぬかれず、外來語辭典の定本をつくりたいとおもひつゝ、いはゞ中間報告ともいふべき未定稿本にはつたのは、まことに遺憾であり、慚愧にたへない。たゞ博雅の叱正とべんだつをまつて、狂愚にむちうち、禿筆をかつて、完成にちかづくことをえたいとこひねがふのみである。

本書は、かくて、もぢろんいさゝかも完璧をほこりうるどころではないが、しかし、外來語の代表的なものは古今を通じてことごとくこれを網羅し、利用いかんによつては縦横無盡にインフォーマーションとサヂェスチョンとを蔵する寶庫として、すくなくとも部分的には、専門家にもある程度の満足をあたへ、一般教養人士には興味ある readable dictionary (よんでいってもおもしろい辭書) たり、また一般讀書人士、文筆家、教育家、中等以上の學生、あるひは家庭の主婦などには有用益なる、かつ信頼すべき辭書たりうるに堪へるものがあると思はるに、こゝにあつかましくもみづから江湖好學家の御愛用を切にいのりまをすしだいである。

紀元 2600 (西曆 1940)
なびや にて
あらかわ そらべる

凡 例

1. 外來語の意義

外來語とは國語化した外國語のいひである。すなはち、外國語のある語句の音と意義とを一所に、——語としてのすべてお——そのまま借用したもので、言語學上いはゆる音譯借用語のことである。されば、もと外國語でなかつた外來語もよに 1 語もなく、國語でなひ外來語もよに 1 語もないのである。外來語は國語のアクセントではななくて、翻譯語のアクセントである。たとふれば、外來語は國語中のはなよめである、ふるくなればははともたり、おばあさんともなるものである。

II. 語彙の構程 嚴選

(1) 本書へんさんの根本方針にしたがつて、外來語プロパーと目すべきものは遺漏なく採録するやうにつとめた。したがつて、國定もしくは協定の教科書、法令、「標準用語」、經典、「バイブル」、運動競技規則、古今のクラマツクス、etc.、わがオーリテイの文獻にいづるものは、古今をとはず、なるべく採録することにした。(古語も代表的なものは採録した。)

そして選擇の最高標準はつねにポピュラリテイ——人口に膾炙すること——具體的にいへば、わたぐしのいまままでの調査において、頻出すること——におき、それに常識の判斷を加味した。それとともに、わが國語乃至文化史上、著名なもの、あるひは關係のおかひいものと、外國の風物文化研究上必要なもの、教養ある大國民的國際人としての常識上必要なものと、ひろい意味において教訓的なものと、は、つねに念頭において選擇の標準とした。

されば、エッセイイクロペディヤ的に exhaustive に遺漏ないといふことは、はじめより期するところではなかつた。これがあつてかれのない、といふやうなばあひは、しばしばあるであらう。

(2) Weeikley がその著語源辭典の序に“本當に好奇心をおこさせるのは、つねに、普通でない語や新造語にきまつてゐる。”といつたとほり、ぼんとは、本書に關愛した、第 2 次的ともいふべき外來語のなかに、いかに外來語としておもしろい

ものがおほい。また、あたかも化石の1片も古代生物の研究上貴重な材料であるがごとく、ふるい、あるひはあたらしい文獻にまれにあらはれる、いはゞ第3次的ともいふべき外来語のなかには、文化史上貴重な材料たるものがすくなくない。がこれらはすべて、ローチの關係上割愛した。

(3) 日本語の約半數以上もしめる漢語は、勿論外来語であるが、これらは國語辭典、漢語辭典にゆつとつてしかるべきものとして、考慮のほかにおいた。支那料理、麻雀、など比較的最近の用語だけでも、のせたいとはおもつたが、1つはローチ數の關係もあり、1つはこれも支那語といふことはわかかつてゐるので、これらも割愛した。

ただ國語の日本語とおもはれがちな支那語よりの外来語は、できるだけ採録した。

III. 強 化 し 語

(1) 原則として、いふまでもなく、日本語化した發音にしたがふ。

しかし、單にルースのため等で發音法がまちまちであるものは、原音にちかい方にしたがふ。

(2) 50音順、清音、濁音、半濁音の順序。

(3) 長音(ー)、促音(っ)は順序において無視する。(ちなみにいふ、實際において、長音、促音はあつてもなくとも同一のはあひが非難におほい)。

(4) ㄱ, [p][b][m]音のまへ、あるひは原音が[m]音のはあひはまとする。

(5) [ə]はイエ。[æ]はエア。[oa]はオア。(イエ、エア、オア、でないときは、イエ、エア、オア、をみることに)

[je]はイエ。(エでないときは、イエをみることに)

[wa]はワ。(アでないときは、エをみることに)

[v]はヱ。(バ行、フ行、でないときは、ヱをみることに)

[ei]はエー。(‘スベイヴ’のごときは例外)

[ou]はオー。

[kwa]はクワ。[gwa]はグワ。(カ、ガ、または、クワ、グワ、でないときは、クワ、グワ、をみることに)

[ai]はアイ。(ア)はア。

[je]はジエ。[ge]はジエ。(セ、ゼ、でないときは、ジエ、ジエ、をみることに)

[θ]はス(サ行)。[θ]はズ(ザ行)。
[dʒ]はヂ。[dʒ]はジ。(ジ、ズ、でないときは、ヂ、ジ、をみることに)

[tʃ]はチイ。[tʃ]はチイ。[tʃu]はチュウ。[tʃu]はチュウ。[tʃ]はトウ。[dʒ]はジウ。[ʃ]でないときは、チイ；ヂイ；ジウ、でないときは、ヂウ；ツ、でないときは、トウ；ヅ、ズ、でないときは、フウ；をみることに)

[h]はフア。[h]はフア。[h]はフエ。[h]はフオ。(へ、フア、でないときは、フア；ヒ、フオ、でないときは、フエ；ホ、フオ、でないときは、フオ；をみることに)

[l] [r] はル (ラ行)。

IV. 原 語

ローチ體の言語名とマシツク體の原語が日本語よりみての直接の原語、すなはちち母語で、イタリツク體の言語名とローチ體の原語は日本語よりみての間接の原語、すなはち祖語、または傍系の間接の原語であること、または日本語の翻譯の部分にあたること、などをしめす。

例 フェニクス [(G>) L phoenix > O feniks, D Phönix, F phenix (L phoenix, phenix)] Gは日本語フェニクスの間接の原語、すなはち祖語；GよりL, LよりO, D, F, にうつり、そのうちL, O, D, Fがともに日本語の直接の原語、すなはち母語；EはO, D, Fと姉妹關係にあるが、日本語フェニクスの直接の原語ではない。

V. 引用文獻

(1) 引用文獻は、なるべくふるいものを第1の、ただちに解説などにやくだつものを第2の、教訓的なもの、興味あるものを第3の、標準にしてをえらんだ。しかし、あまりながすぎるとか、その他の關係で、その標準はつねにまもりがたいものがあった。

(2) まごびきのものは、まご(ト)のかたちでしめした。

(3) 數字とか、字圖のおほい漢字とかは、著者の國字成漢觀のうへより、原文をあらためたところもある。(しかし漢字がし

めたいはあひには、この時局下に印刷に多大のさせいをほらつてもらつたところが好ましい。

(4) デートは明治、大正、昭和の1部分のほかは西暦でしめす。(現行の著作、すなはち明治末期以降のものは、特別の必要なきかぎり、煩をさける意味で、デートをつけなかつた)。

(5) ローマ数字の大字 [I, II, III, …] は、巻、書、編、篇、部、章、*etc.*、すべて編著の第1の大きい区劃；ローマ数字の小字 [i, ii, iii, …] は、章、節、場、*etc.*、すべて編著の第2の大きい区劃；アラビア数字 [1, 2, 3, …] は、小節、項、*etc.*、すべて編著の第3 (もしくは最小) の区劃をしめす。p., pp. (数字解小節) をともなふアラビア数字はページをしめす。(短篇、新聞小説、イレヂウツスのある著書、などにおいてはこれら所在をしめさないものもある)。これらおよびその他のこと、は、すべて、普通の用法にしたがふか、または常識で判断ができる方法をもちひたから、これ以上ここに一々解説することをさける。

VI. 原 語 名

A	=	アマリカ語
Al	=	アイヌ語
Ar	=	アラビア語
C	=	支那語
D	=	ドイツ語
E	=	英語
Eg	=	エゾアムト語
F	=	フランス語
G	=	ギリシヤ語
H	=	ヘブライ語
Hh	=	ヘントウスターニ語
I	=	イタリヤ語
K	=	朝鮮語
L	=	ラテン語
M	=	マレー語
N	=	日本語
O	=	オランダ語
P	=	ペーリ語
Pe	=	ペルシヤ語

Po	=	ポルトガル語
R	=	ロシア語
Skt	=	サンスクリット (梵語)
Sp	=	スペイン語
T	=	トルコ語

その他は概して略語をもちひず、どうせ音譯語をもちひねばならぬ、とほい地方の言語名は英語でしめす。

VII. 略 字 解

cf.	=	比較、参照。
do.	=	同上、同書(に)。
<i>etc.</i>	=	エトセトラ、など、等。
f. ff.	=	以下(のページ)。 (ff. は複数)。
ib.	=	同處(に)。
p. pp.	=	ページ。(pp. は複数)。
passim	=	諸所に。 [散見、頻出。]
pl.	=	複数。
q. v.	=	そこ [該項] をみよ。
sing.	=	単数。
s. p.	=	[=spelling pronunciation] = つづり字式發音。

その他、まれに、品詞をあらはす略字、たとへば、adj. = 形容詞、n. = 名詞、v. = 動詞、などをもちひたが、一般的用法にしたがつたから、常識でわかるはずである。

【本】= 衣服、【化】= 化學、【篇】= 篇頁、【數】= 數學、【動】= 動物、など専門をしめす略語は、自明のもの、常識をもつて理解しえられるもの、乃至一般的用法のもの、のほかに略語をもちひないから、こゝに全部を解示しない。

VIII. 符 號 解

……	=	省略 [上略、中略、または下略]。
=	=	おなじ。シノニム。引用文中では、みだし語を略したばあひにもちひる。
x	=	反對、アソトニム。
+ >	=	くわえる。合成語。(みきはひたり) } から、より。借用、轉化。
<	=	(ひだりはみぎ)

* 専門語. 術語. テクニツクス. (前述のとく, 本辞典収録の語は大部分専門語であるが, それが専門家以外にももちひられる類のものは, 本書では専門語としない.)

* 俗語 [=スラング]. 隠語.

* 方言.

[] (1) 原語.

(2) 發音.

(3) 'または'. 前言をいひかへるはあひ.

() (1) 説明.

(2) ルビ.

(3) 省略じうること.

(4) 語源中では祖語または傍系.

【 】 専門部類.

[] 引用文献. 出典.

[] 次行よりかへる.

みだし語のみぎかたの 1,2,3... シノニム, 同一意味の語の變形.

例 フラウンズ派¹

フラウンズカ派²

フラウンズカン派³

フラウンズケン派⁴

フラウンズコ派⁵

(引用文のまへの 1,2,3, はこの 1,2,3... に對應する.)

みだし語のみだりかたの 1,2,3... ホモニム, 同音異義の語.

例

1 フラウンク

2 フラウンク

3 フラウンク

4 フラウンク

5 フラウンク

ア

ア [C] 我 [a] > K a²] 1. 溯原語彙; 日本語源考 2. 日本外来語辞典] = ア.

* アイアムバス [(O>L>) E iambus] 【詩】短長格. 低高格. 抑揚格(—). [坪内逍遙: 英詩文評釋; 川路柳虹: 詩の本質・形式]

* アイアムベック [E iambic] 【詩】短長格の. 抑揚格の(—の). [昂起四歩格即ちアイアムベック テトラミーター—坪内逍遙: 英詩文評釋] [アイアムベック ベンタミーター(短長音五歩格)—逍遙譯: テムベント, 附録]

* アイアソ [E iron] 【コルツ】[=鐵製のヘッドを持つクラーブ—近藤彌一: 最新ゴルフ術, 用語] [アイロンが火のしで, アイアソがアイソの道具である—楚人冠: 山中説法, p. 6]

アイソオリー [(L>F>) E ivory] 象牙, 象牙彫刻. [ぞうげ=アイソオリー—明治初年, 外國通商異國ことは限] [アイボリーと云へば象牙(アイボリー)に彫刻したものを指す—美術辞典, ぞうげ]

アイソネリー紙 [E ivory-paper] 象牙色の光澤のあるあつひ洋紙. [片倉徳四郎: 加工紙製造法, VI. p. 13]

アイソネリーナット [E ivory-nut] 象牙柄桐 (ivory-palm) の果實. [アイソナットと云ふ. 其實堅うして角の如く, 形栗實の如くにして大なり. 花旗人等是を用ひて, 種々の細工をなす—1880 玉虫註: 菰米日録, III]

* アイソオリー—アソック [E ivory-black] [=焼いた象牙から取つた黒色の絳具—美術辞典] [三宅克巳: 水彩畫手引]

アイコノクラスム [(O>) E iconoclast] 偶像破壊 (主義) 者. アイコノクラスム [E iconoclasm] 偶像破壊 (主義). [厨川白村: 文藝思潮論, 4; 同: 近代文學十講, p. 139]

アイソス [E Isis] 【エチオプト神話】女神の名. オシリスの妻=アイソスが生れられました. オサオリスは太陽の神で, またナイル河の神で, 毎年洪水を起してはその妻のアイソス(東方の惑)を訪ねて来ると思はれてゐました.—野上彌生子譯: 希臘羅馬神話] [紫野天來譯: 失樂園, I; 豊島興志雄譯: レミゼラブル, Ii. 8]

アイシャドウ [E eye-shadow] [=眼に陰影をつけ, 顔を立體的に見せるため眼輪に塗る化粧用クラーブ—大辭典]

アイヌ [E ioe] 1. 米。〔アイヌ—明治初年、外國通商異國ことば附；瀧本二郎：歐米の習慣作法, pp. 129, 302〕 2. 〔世人、高利貸營業者にアイヌと稱するは、高利貸・米菓子の普通の略言なり。一石井研堂：増訂明治事物起源, p. 725〕 [1897, 尾崎紅葉：金色夜叉；1900, 小杉天外：初夢がた]

アイヌ・ウオーター [A ice-waler] 〔アイヌ・ウオーター即ち清涼水(シャープレット)註：米國には ice-cream と ice waiter = shebet の二種あり、前者は法定量の脂肪を含有すれども、後者は含有せず。一日野・久保寺共譯：世界藥學史, p. 221〕

アイヌ・クリーム [A ice-cream] 〔荔枝とアイヌ・クリームを米を上る—報知 97, 明治 6-7-17, 行幸の記事〕 [東京新富座の閉業式、來賓にアイヌ・クリームを備ゆし—有喜世新聞, 明治 11-6-8]

アイヌ・クリーム ソーダ [A ice-cream soda] ソーダ水にアイヌクリームをいれたもの。〔中條百合子：伸子〕

アイヌ・ケーキ [E ice-cake] 米菓子の一種。〔サトウ・ハチロー：夜店そとあるき；大朝, 昭和 7-3-21〕

アイヌ・コーヒー [E iced coffee] 氷でひやしたコーヒー。〔菊池實：勸章を賞ふ語；穂田秋聲：赤い花；牧逸馬譯：バツトカール〕

* **アイヌ染料** [E ice dyer] 〔=人造染料の一種類、染色中、往々氷を用ひて冷却するを要するので、アイヌ(氷)染料の名がある—國譯百科〕

アイス・ティー [E iced tea] 氷でひやした紅茶。〔細田長樹：眞理の春〕

アイス・ボックス [A ice-box] 冷蔵庫。〔機械標準用語〕

アイス・ホッケー [E ice-hockey] 〔スホーツ〕氷上でおこなふホッケー。〔青木未弘：スケートソング；氷上競技規則〕

* **アイゼン** [D Eisen] 1. 〔アイゼン(鐵)—北島造船：天竺行路文所見 II〕 2. =シュタイクライゼン。かんじき。〔大島亮吉：山, pp. 110, 359；藤木九三：嬰表競走, pp. 28, 39, 49, 50；深田久彌：山岳展望, pp. 7, 72, 93〕

アイ・ダブリュ・ダブリュ [A, E I.W.W.] 〔社〕〔北米合衆國のサンチカリズムは I.W.W. (The Industrial Workers of the World) によつて代表されてゐる。I.W.W. は、大體の精神に於ては、サンチカリズムと異なるところはなない—生田・本間：社會問題十二講, p. 245〕 [内田爲庵：蝶の舌 p. 3]

アイディア [(イ>ム>) E idea] 1. 〔哲〕フラスコンの觀念。カソ

トの觀念=イデア。〔フラスコンのアイデア—大西博士全集 V, p. 483〕 [觀念(アイデア)(表象)—得能文：哲學講話, p. 133] 2. 〔文藝〕 想、着想。〔文藝上に言ふところのアイデアなるものは、形而上學に於て言ふところのアイデアとは、名を同しうして物を異にする者。—北村透谷：内部生命論〕 [西洋語でいへばアイデア、即ち意匠とも云ひ、心とも云ひ、精神とも云ひます—1888, 坪内操譯：美術論〕 [妙想(アイデア)—1882, フエノロサ述：美術真説] [想(アイデア)—1893 坪内逍遙：美術論稿] [想(アイデア)—1894, 北村透谷：エマルソソ]

アイディアリスト [E idealist] 1. 〔哲〕 觀念論者。唯心論者。〔形而上學に於てアイデアリスト(唯心論者)といふものは、文藝上に於てアイデアリスト(理想家)といふところは全く別物なり。—北村透谷：内部生命論] 2. 〔文藝〕 理想家。理想主義者。〔理想家(アイデアリスト)—逍遙閑談, p. 368；逍遙：袖の帯, p. 64〕 [理想主義者(アイデアリスト)—ケーベル博士隨筆集 p. 57；落合三郎：染色體(クモソーマソ)]

アイデアリズム [E idealism] 1. 〔哲〕 觀念論。唯心論。〔觀念論(アイデアリズム)(唯心論)=主觀的觀念論—得能文：哲學講話, p. 133] 2. 〔文藝〕 理想主義。〔アイデアリズム(架空癖)(昔の小説や則那子にあるやうなる、世の中にありきうにならぬ事を實際に行つて見せし思ふ癖をいふなり)—1885, 坪内逍遙：實世書生氣質〕 [素材を理想によつて變化するものは理想主義(アイデアリズム)である。—黒田鵬心：美學及藝術學概論, p. 184]

アイデアル [E ideal] 理想(的)。〔架空的(アイデアル)—1885, 坪内逍遙：實世書生氣質〕 [人物の善惡を定めんには、我に擬美(アイデアル)なかるべからず—1886, 冷々亭主人：小説總論]

アイデンティファイ [E identify] 同一視する。同一なることを證明する。〔夢ではさういふ人間だと云ふことをよく知つてゐるが、現實には、誰と云つて、それをアイデンティファイする者はあない—里見瑛：直駒の夢〕

アイデンティファイケーション [E identification] アイデンティファイすること。〔正確離取(アイデンティケーション)—野口米次郎：俳句獨英詩論〕 [新村田：南緯廣記, p. 83；吉村冬彦：蒸發皿, p. 314]

アイドル [(イ>ム>) E idol] 偶像。崇拜物。〔偶像(アイドル)—逍遙閑談, p. 108〕, 〔どんな美しいのを視たつても、氣移りはしない。我輩にはアイドル(本尊)が一人有るから—1887, 二

業字四迷: 浮雲, 7)

アイドル システム [E idle system] 【経】 無封鎖資金制度.

アイヌ [Ai ainu] 北極道・樺太などにすむ1人種の名. その人

種の自稱で, 'ひと' の義. いにしへにユ, エミシといたつたもの.

アイノともいふ. [1804 遊要分界圖考 passim; 尋常小學國語讀

本, XI, p. 62]

アイノ [Ai ainu]=アイヌ. [1779, 一語一言; 1883, 日本風俗

備考 VI; 1876, 東北御巡幸記; 豊安房: 開國起原, pp. 179,

1620, 1625]

アイ ラヴ ユー [E I love you.] [I love you や Je t'aime

に至つては何としても之を日本語に譯すことが出来なない. まろい

ふ英語や佛蘭西語にある言語感情(ヴエルト グラフェール)が全く

日本語では出ないのである. 'わたしあなたを愛してよ' 'わたし

やあなたにいらはにほの字よ' ではまるで成つておない. 厨川白

村: 近代の戀愛觀 [Je t'aime でも I love you でも, これに

びつたり當てはまる譯語がない.—櫻口九廣一: 遊心錄, p. 78]

アイ ラヴ エー [=I love you] 貴方に戀してよ' では分ら

ない.—江南文三: 結婚失敗者の公開狀 [アイ ラヴ エーつて

のは, 和製でいへば, 私あなたに惚れ惚つてんだ.—中村正清: こ

世の中は曲つとる] [アイ ラヴ ユー. 奈はハッデーである

ぞよ.—村上知義: 日語觀察] [彼女の首を掻き, 'アイ ラヴ

ユー' と云つた.—黄洋和郎: 風俗素描]

アイリス [(ア>L>) E Iris] 1. 【ギリヤ+神話】 [虹の神アイリス

—杉谷代水: 希臘神話] [虹の女神アイリス—野上彌生子譯: 希

臘羅馬神話] 2. 【植】 いちはつ風. [アイリス(アイリス)—風見吉:

花叢花井園藝 p. 405] [フランスの百合と稱せられるアイリスの

實—大木精一郎: 服装史 p. 301] 3. 【寫】 寫真機の絞リ. [1819

Herschell 氏がアイリス式絞リを考案した.—寫真百科, 寫真年

史]

アイロニー [(ア>L>) E irony] 反語. 皮肉. いやみ. おて

こすり. =イロニー. [皮肉(アイロニー)—道彦譯: チュムニスト,

附録: 道彦翻譯, p. 300] [濃疊的(コロンチツク)アイロニー—

夏目漱石: 三四郎] [反語(アイロニー)—高橋五郎譯: 衣服哲

學, II, iv, III, x; 加藤武雄: 東京の類, 18]

アイロニカル [E ironical] 反語的. 皮肉な. いやみたつぷりな.

おてこすり. [皮肉(アイロニカル)な—櫻井鶴村: 世界の衣食

住. p. 111] [反語的(アイロニカル)—加藤武雄: 東京の類, 19]

アイロン [E iron s. 1] 洋式ひのし. こて. (cf アイロン). [ひの

しとアイロンの如き, 元來同意語なのであるが, そのおらはす

内容に相異を生じて來てゐる.—安藤正次: 國語學總論, p. 94]

アイン パール [D ein Paar] 1 つの. 1 ぐみ. 1 ぐみの夫婦.

または男女. カツラなどいほおなじ. [アイソパール(對)

—巖谷小波: すまわ日記] [二人連れ(アイソパール)—藤原成吉:

轉變時代, 1, 2]

アヴァンガード [F avant-garde] 前衛. 前衛映畫(フランスの

映畫界の新人によつてつられた映畫). [新文壇の所謂アヴァ

ン・ガルドに立つて陣鼓(タムガルド)を鳴らす.—荷風隱筆, p.

309] [前衛的の, つまりアヴァン・ガルドといふフランス語.—若

崎規: 映畫藝術史 p. 137]

アヴァンチュール [F aventure] 冒險. 戀愛事件(アヴァンチュア).

情事. 夜通. [1910, 森鷗外: 青年; 南部修太郎: S 中島のア

バンチカール]

アヴェック [F avec] 原意は 'いつしよに' (=E with) なれど,

邦語では同伴の意. [アヴェックと言つて居る言葉には特殊な意味

がある. 日本では他の言葉を以てしては言ひおろはしかねる體勢

な意味を伴つて居る.—戸川秋骨: 自彙傳, 雜譯類] [結婚早なら

しいアヴェックが乗つた.—徳田秋聲: 目の書] [アヴェックで, 斯ら

いふ教室で御馳走たべさるの, 好いな.—片岡健兵: 花柳學校] [美

女の同伴(アヴェック)—吉屋信子: 双鏡] [且那とアヴェックで.—長田

粹彦: 心中比翼玉]

アヴェニュー [(ア>) E avenue] なみきみち. おほほどほり. (大通

(アヴェニュー)—1908, 永井荷風: おもしろい博覧] [並木路(アヴェ

ニュー)—坂村眞民: 窓の並木路] [白井白梅: 燕の一語]

アヴェ マリア [D ave Maria] [=マリアに禱ふれ' の意—國譯

百科] [=聖母を頌する前禱. 朝夕及び正午之を唱す.—村上直次

郎譯: 耶穌會士日本通信, 上, 索引] [アヴェマリア. マリア

に申おひ奉るきだまりたるオラヴェンディヤ. アヴェ マリアといふ

オラヴェンディ.—1600, フチリチ. キリシタン]

アウトカリー [D Antarkiel] 自足. 自給自足經濟. [自足(アウタ

ルキー)—ケーンベル博士隨筆集, p. 101] [アウタルキー (自足の

意)—安部龍成: 西洋古代中世哲學史, p. 61] [アウタルキー (自

給主義)—大野・白崎: 日本國勢圖會, 昭和 10, p. 58]

アウト [E out] 1. 【陸球・卓球など】 [ボールのイッ若くはアウ

トはボールの落下點を以て判定すべし。—軟式庭球規則, 10 條]
 アクト 球が線の外へ出た時—可兒徳: 競技と遊戯, p. 395] 2.
 【野球】 [除外(アクト) (普通に殺されるといふ。)—1896, 正岡子規:
 松葉玉遊] [=刺殺—野球の用語] [=攻撃の不成功によつて遊戯
 者が遊戯を退かしおられるのをいふ。—國解百科] =ダウンス、ダウ
 ン(死者(ウ—アクト)、—死者(ウ—アクト)、無死者(ウ—アクト)
)—野球規則, 44-49 條] 3. 【拳闘】 死。まぢ。[…チャイフ、十秒
 (アクト)—橋爪徳: 返り突(華)]

アクト オブ デイト [E out of date] 時代おくれの。陳腐の。
 【邦内逆造: 變化雜; 大宅壯一: アレイン・ス・ポーツ論]

* アクト オブ バウンズ [E out of bound(s)] 1. 【排
 球】 ボールはそれがコート外の物體或は地表に觸れたるときア
 クト オブ バウンズなりといふ。區劃線に觸れたるボールはア
 クト オブ バウンズに非ず—排球規則, 6 條] 2. 【雜球】 [境
 界線または境界線外の床に、競技者の身體の如何なる部分にても
 觸れたる時、その競技者はアクト オブ バウンズなり。ボ
 ルの何れの部分にても境界線・境界線外の床・境界線外の物體・
 バルコニー・バツボーム下の支柱または裏に觸れたる時、また
 アクト オブ バウンズなる競技者がボールに觸れたる時、ボ
 ルはアクト オブ バウンズなり—雜球規則, VII, 2] 3. 【エ
 ルド】 [アクト オブ バウンズ=地域外? とは競技の禁せられ
 である地域全體をいふ。—山崎高麗: エルド規則, 定義 8]

* アクト オブ プレイ [E out of play] 【雜球】 [ボールがグッチ
 ライン又はエーム・ラインを横きり場外に出でたる時は、ボール
 がアクト オブ プレイにありといふ。—可兒徳: 競技と遊戯, p.
 421, フットボール]

アクト・カーヴ [A out-curve] 【野球】 [外曲(アクト・カーヴ)—
 1896, 正岡子規: 松葉玉遊] [=外曲球—野球の用語]
 アクト・コーナー [A out-corner] 【野球】 [=打者に遠いホーム・
 プレートの一端(を通過する球)—野球の用語]
 アクト・シュート [A out-shoot] 【野球】 [=外射球。打者の外側に
 射曲する投球。若し此球が角度を付けて曲る時は之をアクト・カ
 ーヴと稱する。—野球の用語]
 アクト ドロップ [A out drop] 【野球】 [=外下曲球。打者に遠
 く曲りながら落下する球。—野球の用語] アウ・ドロとも略す。
 アウト・プレイヤー [E out-player] 【庭球】 =レシーブマン。【次
 の場合においてサーブマンは一點を得。 (2) 他のアクト・プレイヤー

—に向つてなされたるライオン・サーブマンを受けたるとき、(3)サ
 ーブマンが地に落ちざる前直接にアクト・プレイヤーのラケット
 または身體・着物・所持品に觸れたるとき—軟式庭球規則, 30 條]
 【日本外来語彙典】

アクトライオン [E outline] 輪廓。略圖。梗概。【輪廓(アクトラ
 イオン)—逍遙劇談, pp. 47, 53] 【筋(アクトライオン)—黒田鹿心:
 美學及藝術概論, p. 201]

アクトロ [A out drop] 【野球】 アクト ドロップの略。【橋戸信:
 野球, p. 256; 辰野暉: フック, p. 346; 邦技二: 青春は輝く;
 藤田成男: 日本名技手列傳, 野球勇士傳]

アウフヘーベン [D Aufheben] [成立—反成立—綜合 (正—反—
 合) の過程を以て精神が發揮するに當り、最初の 2 段階が後の段
 階に於て綜合せられる關係を止揚(アウフヘーベン)と呼ぶ—入
 澤: 教首辭典, 止揚] [—ヘーゲルは正・反より一段高い合—進む
 ことをアウフヘーベンといつた。従來哲學者はこれを止揚と譯し
 てゐたが、近來はまた揚棄と譯すものもある—土田杏村: 思想讀
 本, p. 128] [止揚(アウフヘーベン)—阿部次郎: 人格主義, p.
 180; 得能文: 哲學講話, p. 274]; [近代語「揚棄(アウフヘーベ
 ン)』—貴司山治: 同志愛] [陳に對する夢を揚棄(アウフヘーベ
 ン)するやうに—細田民樹: 生活線 ABC]

アウロラ [L>D Aurora] 【ローマ神話】 おけぼのめがみ、ニオ
 ーロラ。【土井敏察: 譯語: 生田長江譯: 神曲, 煉獄 2; 高橋五
 郎譯: 衣服哲學, II, ii, v, III, vi; 木村毅譯: クマ・ウテデス,
 passim.]

アウソ [Skt. ahimsa] 【阿吽】 [悉曇に、阿を字母の初韻とし、吽を
 終韻とし、一切萬物の原理を示すとす。阿は口を開き、吽は閉つ、
 因りて、息の呼吸出入とし、阿吽の息など云ふ。寺門の左右に立
 てる金剛力士(二王)、堂社前の左右に置ける石獅子など、一は口
 を開き、一は閉つてある、是れなり—大言海] [阿吽二字、出入
 息無し—悉曇三密鈔, 下] [田息阿、入息吽—觀阿鈔, 下] [相撲の
 仕切に、阿吽の呼吸を合はす—光明真言觀講要門, 上] [由で入
 る息に、アウソの二字を稱へ—誦曲, 安宅; 近松: 萬年草]。
 アカ [Skt. argha, Pa argha] 【阿伽, 勝伽】 1. 佛にそなへる
 みづ。【阿迦, 此云水—釋譯名義集, III] 此即香水之水。
 一大日經疏, XI] [水をアカといふ。アカは梵語阿迦也。—1719,
 東雅(總論) 2. 奈水。ふなゆ。ふなぞこになまつたみづ。【船中に
 て水のことをアカと云ふは、皆なりと云へり。—侯訓栞] 【船底の

解題 澤 正 宏

近現代日本語辞典選集
【モダン語辞典・事典・用語編】

第 4 卷

クロスカルチャー出版

凡 例

1. 本書は『近現代日本語辞典選集』【モダン語辞典・事典・用語編】（全4巻）の第4巻である。
2. 本書は澤 正宏氏所蔵のものを使用した。
3. 本書の底本は下記の通り。

第1巻『近代詩用語辞典』河合醉茗編著（紅玉堂書店、大正13年10月5日発行）。初版。

『プロレタリア文藝辞典』山田清三郎、川口浩編著（白揚社、昭和5年8月25日発行）。初版。

『文學新語小辞典』生田長江編著（新潮社、大正6年5月15日発行）。第18版。

『モダン語辞典』鶴沼直編著（誠文堂、昭和6年2月28日発行）。第45版。

『現代術語辞典』「毎日年鑑」附録、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編纂（大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、昭和6年10月1日発行）。初版。

第2巻『モダン流行語辞典』麴町幸二編著、喜多壮一郎（早大教授）監修（実業之日本社、昭和8年1月8日発行）。2版。

『増訂 哲学辞典 全』朝永三十郎（文学博士）編著（東京宝文館、大正8年10月10日発行）。増訂8版。

『最新 市場用語解説 別輯 英米市場用語詳解』中外商業新報社市場部編（森山書店、昭和7年12月7日発行）。再版。

第3巻『外来語辞典』あらかわ そうべゑ編著（富山房、昭和16年6月10日発行）。初版。

第4巻『英語から生れた 現代語辞典』英文大阪毎日学習号編輯局編（大阪出版社、昭和5年9月8日発行）増補11版。

4. 復刻に際し、読者の利用の便に鑑み、適宜拡大縮小をして収めた。
5. 第4巻巻末に、澤 正宏氏による解題を付した。

近現代日本語辞典選集【モダン語辞典・事典・用語編】

第4巻 目 次

英文大阪毎日学習号編輯局編：

英語から生れた 現代語辞典 昭和5年 増補11版 1~409

解題（澤 正宏） (i)~(viii)

發行所 大阪出版社

英語から
生れた
現代
語辭典

英文大阪毎日學習號編輯局編

現代に於ける新聞、雜誌、書籍等に散見し又演説、講演其他日常の會話などに用られてゐる外國語で殆ど日本語同様となれる新熟語は數千語に達してゐる。而して之等の一通りを心得て置かねば時代は時代は任して行くことは不可能の實勢である。この種の言葉を集め現代語辭典として發行し既に數十版を重ねたるも、時代の進歩、變遷に伴つて之等新語は益々激増使用されつゝあるに鑑み、今回根本的に増補改訂して萬遺憾なからしめたのが本書である。

本書には現今使用されてゐる凡ゆる現代語を網羅せるは勿論又漢和辭典其他の辭書に漏れてゐるものも掲げておいた。随つて本書によれば現今使用されてゐる現代語の難解に苦しむ事はないと思ふ。字句の配列は音引を始めるとし清音濁音を順序としイロハ順に配列した、説明は可成平易解説に努め且つ所々に引例を示して會得を容易ならしめた、本書には語源の發音に拘泥せず我國で言ひ慣らされてゐる發音通りに掲げしものも多い、又各字句其語源を附したれば英語を知るにも甚だ便利であるを確信する。

凡 例

英語から現代語辭典

英文大阪毎日學習號編輯局編

- イイト (eat) 食ふ。食事する。
 イイチ (each) 各。各目。【例】イチイチザザいお互に。
 イーガー (eager) 熱心なる。熱望せる。(イーガーホープ 熱烈なる希望)
 イーガイナーズ、オズ、アウ、シシヤ、ハート (Eagerness or our sincere heart) 吾々の真心からの熱情。
 イーガイー、アイズ (eagle eyes) 慧眼。鋭き眼。
 イーグル (eagle) 鷲。米國の十弗金貨。(イーグルアイトマン 慧眼の人)。
 イーゾ (eve) 夕。晩。祭日の前晩(クリスマスイーゾ)を云へばクリスマス祭の前

索引

イ	一	一	イ	一	イ	一	イ	一	イ	一
ロ	二	二	ロ	二	ロ	二	ロ	二	ロ	二
ハ	三	三	ハ	三	ハ	三	ハ	三	ハ	三
ホ	四	四	ホ	四	ホ	四	ホ	四	ホ	四
ヘ	五	五	ヘ	五	ヘ	五	ヘ	五	ヘ	五
ト	六	六	ト	六	ト	六	ト	六	ト	六
チ	七	七	チ	七	チ	七	チ	七	チ	七
リ	八	八	リ	八	リ	八	リ	八	リ	八
ヌ	九	九	ヌ	九	ヌ	九	ヌ	九	ヌ	九
ル	十	十	ル	十	ル	十	ル	十	ル	十
イ	一	一	イ	一	イ	一	イ	一	イ	一
オ	二	二	オ	二	オ	二	オ	二	オ	二
カ	三	三	カ	三	カ	三	カ	三	カ	三
ク	四	四	ク	四	ク	四	ク	四	ク	四
ケ	五	五	ケ	五	ケ	五	ケ	五	ケ	五
コ	六	六	コ	六	コ	六	コ	六	コ	六
ク	七	七	ク	七	ク	七	ク	七	ク	七
ケ	八	八	ケ	八	ケ	八	ケ	八	ケ	八
コ	九	九	コ	九	コ	九	コ	九	コ	九
ク	十	十	ク	十	ク	十	ク	十	ク	十
ケ	一	一	ケ	一	ケ	一	ケ	一	ケ	一
コ	二	二	コ	二	コ	二	コ	二	コ	二
ク	三	三	ク	三	ク	三	ク	三	ク	三
ケ	四	四	ケ	四	ケ	四	ケ	四	ケ	四
コ	五	五	コ	五	コ	五	コ	五	コ	五
ク	六	六	ク	六	ク	六	ク	六	ク	六
ケ	七	七	ケ	七	ケ	七	ケ	七	ケ	七
コ	八	八	コ	八	コ	八	コ	八	コ	八
ク	九	九	ク	九	ク	九	ク	九	ク	九
ケ	十	十	ケ	十	ケ	十	ケ	十	ケ	十
コ	一	一	コ	一	コ	一	コ	一	コ	一
ク	二	二	ク	二	ク	二	ク	二	ク	二
ケ	三	三	ケ	三	ケ	三	ケ	三	ケ	三
コ	四	四	コ	四	コ	四	コ	四	コ	四
ク	五	五	ク	五	ク	五	ク	五	ク	五
ケ	六	六	ケ	六	ケ	六	ケ	六	ケ	六
コ	七	七	コ	七	コ	七	コ	七	コ	七
ク	八	八	ク	八	ク	八	ク	八	ク	八
ケ	九	九	ケ	九	ケ	九	ケ	九	ケ	九
コ	十	十	コ	十	コ	十	コ	十	コ	十
ク	一	一	ク	一	ク	一	ク	一	ク	一
ケ	二	二	ケ	二	ケ	二	ケ	二	ケ	二
コ	三	三	コ	三	コ	三	コ	三	コ	三
ク	四	四	ク	四	ク	四	ク	四	ク	四
ケ	五	五	ケ	五	ケ	五	ケ	五	ケ	五
コ	六	六	コ	六	コ	六	コ	六	コ	六
ク	七	七	ク	七	ク	七	ク	七	ク	七
ケ	八	八	ケ	八	ケ	八	ケ	八	ケ	八
コ	九	九	コ	九	コ	九	コ	九	コ	九
ク	十	十	ク	十	ク	十	ク	十	ク	十
ケ	一	一	ケ	一	ケ	一	ケ	一	ケ	一
コ	二	二	コ	二	コ	二	コ	二	コ	二
ク	三	三	ク	三	ク	三	ク	三	ク	三
ケ	四	四	ケ	四	ケ	四	ケ	四	ケ	四
コ	五	五	コ	五	コ	五	コ	五	コ	五
ク	六	六	ク	六	ク	六	ク	六	ク	六
ケ	七	七	ケ	七	ケ	七	ケ	七	ケ	七
コ	八	八	コ	八	コ	八	コ	八	コ	八
ク	九	九	ク	九	ク	九	ク	九	ク	九
ケ	十	十	ケ	十	ケ	十	ケ	十	ケ	十
コ	一	一	コ	一	コ	一	コ	一	コ	一
ク	二	二	ク	二	ク	二	ク	二	ク	二
ケ	三	三	ケ	三	ケ	三	ケ	三	ケ	三
コ	四	四	コ	四	コ	四	コ	四	コ	四
ク	五	五	ク	五	ク	五	ク	五	ク	五
ケ	六	六	ケ	六	ケ	六	ケ	六	ケ	六
コ	七	七	コ	七	コ	七	コ	七	コ	七
ク	八	八	ク	八	ク	八	ク	八	ク	八
ケ	九	九	ケ	九	ケ	九	ケ	九	ケ	九
コ	十	十	コ	十	コ	十	コ	十	コ	十

2

イ

晩即ち十二月廿四日の晩を云ふ。又イローはエマンの花園に居たアダムの妻で
神話では人類の祖先である。(アダム参照)イアとも云ふ。

イーブル (Eibull) 禱。悪行。

イービー (Eiby) 安氣な。安樂な。容易な。(市場)金融緩慢の。

イービーホネイ (Eaby-honey) 低利資金。

イービーゴイング (Eaby-going) 仕事をせずぶらぶらと世を渡つて行かうとす

る人を卑めて云ふ言葉であるが、便利なものを人に推薦する場合に「之をお用

ひになるとイービーゴイングの生活が出来ます」など善意に使用される場合

が多い。

イービーゴット (Eaby-got) 安樂上衣。

イーゼル (Easel) 畫架。畫を描くとき畫布などを支ふるもの。

イースト (East) 東。東方の。【例】アライスト (Aly East) 極東。

3

イ

イーストマン (Eisman) 米國に於ける寫真機製造會社の名

イーストマン (Eastman) 東條式發聲映寫。これは東京市外大森にある東條

研究所で發明したものである。

イースター (Easter) 復活祭。基督の復活を記念する爲めの祭、三月廿一日以後の

満月に次ぐ第一日曜に行ふ。

イースタン、チャーチ (Eastern Church) 東方教會。基督教會の中でローマ教會、

及びプロテスタント教會と對立し、教義・制度・風俗の上に於て多少異つてゐ

るがヨーロッパ東部よりアジア西部及アメリカ北部に散在する教會を總稱して

云ふ。

イバンチエリカル、チャーチ (Evangelical Church) 福音一致教會。ドイツのルター

ル教會及び改革派即ちカルビン派教會が一致團結した教會のこと。

イバンチエリカル、ルターチ、チャーチ (Evangelical Lutheran Church) 福音ルター

イリジウム (Iridium) 金属元素の一。化学符號 Ir。原子量一九三。
 イリガトリル (Irrigator) 灌水器。灌水筒。
 イルクック (Iruck) 東部シベリア總督の駐在地。
 イルマツ (Irmao) (葡語 Irmao) 伊留格。宣教師補。
 イルコンジタト (Irconsidered) 淺慮の。淺はかな。
 イルミネイター (Illuminator) 投光器。光照明物。
 イルミネーション (Illumination) 點燈裝飾。飾字。
 イターナル (Eternal) 永遠の。永久の。例彼の戀はイターナルだ。
 イターナル、ガイデン (Eternal garden) 永遠の庭園。(アルシヨア) 階級の人々
 が金に飽かしてつった娯楽場(に名付く)
 イタリック (Italic) イタリック体の活字、即ち Giallo の如き傾斜文字。
 イタリアン、スクール (Italian school) 伊太利學派。最近伊太利に於て自然科學

ル教會。キリスト新教の一派で最も古きもの。ドイツを中心としスカンヂナビ
 ア諸國に於て國教となつて居る。
 イバシエリカル、アソシエーション (Evangelical Association) 福音教會。新教
 (プロテスタント教會)の一派。北米合衆國ペンシルバニア州に移住したホッ
 人ヤコブ、オルライトによつて創始された。
 イニシアル (Initial) 頭字。姓名又は言葉の初めの文字を云ふ。Initials の略。又は
 略語。なごのニハニは何れもイニシャルである。
 イベント (Event) 番組の中の一競技を云ふ。事件。大事變。
 イベントゥル (Eventful) 多事なる。
 イチオム (Idiom) 慣用語。方言。熟語。
 イリデンプル、ペーパー、マネー (Irredeemable paper money) 不換紙幣。
 イリフジオン (Illusion) 幻影。幻相。

6

に基き實驗を重じ刑法學の原理を究明せんことを主張する刑法學の一派。
イタラ、コムニー (Itala Company) 伊太利のイタラにある活動寫眞會社の名。
イレギュラー (Irregular) 不規則な。不規則の。
イレギュラー、バリア (Irregular Verb) 不規則動詞。(文法用語)
イレギュラー、ブルリラル (Irregular Plural) 不規則複數。名詞の正則に依らざる複數。(文法用語)。
イクト (Act) それ。あれ。(情病的には、きわどいものこそを指す)

イ

イシュー (Issue) ①發行。②論題、争點。
イラショナル (Irrational) 馬鹿な。無理な。不合理な。
イラストリウス、ゼネラル (Illustrious General) 名將。
イムパブルス (Impossible) 不動産。

イコール (Equal) 同じ、平等なる【例】此れとあれとがイコールだ。

7

イ

イコリティ (Equality) 平等。均一。

イクルランス (Ignorance) 無學。文盲。馬鹿。

イマジネーション (Imagination) ①想像、②想像力。【例】彼はイマジネーションに富んで居る。

イブ (Eve) イブを見よ。

イブニング (Evening) 皆。晩。夕刻。【例】グロッドイブニング 今晚は(挨拶語)

イブニングパーティ (Evening-party) 夜會、友人知己を招待して夜間に開く宴會
 などを云ふ。

イブニングドレス (Evening dress) 婦人の着る夜會服。

イブセンズム (Ibsenism) イブセン主義。イブセンは「詩いた種は又その人の別
 る所なる」その説を持してゐた。

イブセン (Ibsen) 諾威の劇作家。近代劇文學の父と云はれてゐる。現實主義の立

インバネス (Inverness) 一種の外套。
 インバスト (Inbaste) 洋書描法の一つでカンガスの面に繪具を盛上げて高低を感じさせし描法。
 インニツグ (Inning) 野球試合に於ける所謂「回」である。インニツグ(一回)は双方の打者が順次打撃に立て兩方共各三人の打者がアウトになつた時に終るのである。一試合は九インニツグの定めである。
 インボート (Import) ①輸入品。②輸入する。
 インボーター (Importer) 輸入商。輸入業者。
 インボーター (Importer) 輸入商。輸入業者。
 インボーターズ (Importance) 重大。
 インボイス (Invoice) 送狀、積荷證書。
 インボジブル (Impossible) 不可能な。【例】そんなことはインボジブルだ。

場から社會生活の深刻を描いた。「人形の家」「鴨」等の名作がある。近代新劇運動も彼に端を發してゐる。(紀元一千八百廿八年生。一千九百六年歿)。
 イエス (Jesus) 然り。そうです。その通り。
 イエスキリスト (Jesus Christ) 救世主基督(キリストとは膏を、がれたる者)と云ふ意で信徒が奉つた尊稱。
 イデオロヂイ (Ideology) 空想。觀念論。イデオロギイとも云ふ。
 イメージ (Image) 像。想像を描く。
 イミテーション (Imitation) 眞似。模倣。模造品。【例】此眞珠はイミテーションだ。
 イスム (Isim) 説理、教、……主義、……教。【例】ナショナルリズム (Nationalism) 國家主義。クリスチヤニズム (Christianity) キリスト主義。
 イン (In) 宿屋。
 インパーフェクト (Imperfect) 不備なる。不完然なる。

イ

インペリアル、ガバナメント (Imperial Government) 帝國政府。
 インペラツ、ムード (Imperative Mood) 命令法、命令又は依頼を表すに用ふる
 もの (文法用語)
 インペディメント、イン、スピーチ (Impediment in speech) 頓辯。
 インベチガイト (Investigate) 調査する。
 インベチガーター (Investigator) 調査係。
 インベント (Invent) 發明する。工夫する。案出する。
 インベントリヤ (Inventory) 目錄。案内書
 インベンション (Invention) 發明。
 インブリア (Indoor) 「屋内の」を云ふ意。【例】インブリア、スホーツ (屋内運動
 競技)。
 インブローイ (Indorer) 襄書人。保護人。

イ

インポライト (Impolite) 失禮な。【例】彼はインポライトな奴だ。
 インボランタリ (Involuntary) 不本意の。思ひがけなき。
 インベージョン (Invasion) 侵入。
 インペイスト (Impaste) 畫を描くとき色を厚目に掛けること。
 インヘリター (Inheritor) 相続人。
 インペリアリスム (Imperialism) 帝國主義。個人がその權利を侵害された場合國
 家及び社會に向て保護を要求し得るが、國民がその權利を毀損せられた時は、
 これを訴へることなく獨力自己保存せねばならぬと云ふ處から主張されるのが
 この主義。
 インペリアル (Imperial) 帝國の。皇室の。【例】インペリアル、ホテル (帝國ホ
 テル) インペリアル、ユニバーシチー (帝國大學)
 インペリアル、パリアメント (Imperial Parliament) 帝國議會。

／カント以後の展開を確認)、「唯物論」(同、5頁／古代から近代までの展開を確認)の項を追加しており、日本における近代西欧哲学の一つの総括を成し得ていると言えよう。収録語彙数(立項された語数)は全部で約1475で、内訳は人名などを含む外来語が約520(全体の約35%)、和訳された日本語が約955(全体の約65%)である。和訳された語彙数から見ると、西欧の哲学用語(乃至はこれに関わる言葉)がよく理解され、日本語で広く紹介されていることが分かる。

なお、編著者の朝永三十郎〔明治4(1871)年～昭和26(1951)年、京都大学名誉教授〕は京都学派の一人で、西欧の近世・近代哲学が専門、明治42(1909)年から大正2(1913)年までドイツに留学し、帰国後、主著となる『近世に於ける「我」の自覚史 新理想主義と其背景』(東京宝文館、大正5年)を刊行した。ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎の父である。

『最新 市場用語解説 別輯 英米市場用語詳解』中外商業新報社市場部編(森山書店、昭和7年12月7日発行)。再版、全424頁、19・2×13cm、貳圓。初版発行は昭和7年11月28日。本資料集での復刻は初版発行から9日後の再版(2刷)による。

編集の仕方は、巻頭に「はしがき」、全体の「目次」、「市場用語解説総目次」、「市場取引初心者の手引き」(の目次)をおく(ここまでで計42頁)。次に本書の中心である「市場用語解説」(用語の配列は「50音」順／これだけで計160頁)をおき、これに附随する「市場取引初心者の手引き」「取引所関係法規抜粋」「定款業務規程」「東京株式取引所短期取引員組合規約」などをおく(これだけで計111頁)。さらに、巻末には横書き2段組みで「英米市場用語詳解」(用語の配列は「アルファベット」順)とその「凡例」とをおいている(ここまでで計111頁)。

本書の発行の目的は「はしがき」に述べられている。株式市場をはじめとして、現代の経済組織において重要な役割をもつ、主要取引市場としての米穀、生糸、綿糸、砂糖、人絹、豆粕などの各市場は、一般社会と密接な関係にありながら職業的集団として独立しているため、そこでは難解視され、厄介視される専門用語、術語が生じている。そこで、市場を知りたいとする人の「市場用語に通暁するの必要」のために、「初心者に対する入門書」としてこの「用語詳解」を発行するというわけである。

「はしがき」によれば、元々、市場用語の解説は新聞読者のために計画されたもので、昭和5年の夏以来、中外商業新報に連載した解説を、約2年4カ月後に単行本化したのである。ところが、市場界の現状は国内市場の状況の把握では満足できない状況、つまり、外国市場(殊に米国市場)の状況を知らなければならない状況にあるので、巻末に「別輯」として「英米市場用語詳解」を併せて収録したとも述べている。また、手引きや法規、規程、規約の掲載は新聞読者への参考のためとも述べている。また、本書の総顧問は新聞庄蔵で、あと英米市場用語の翻訳、解説と国債取引とは松浦健三、一般内国市場用語の解説、編集は井尻固、株式会社と新聞市場面の見方については秋枝義広、生糸取引は味野全平、米穀取引は中島幸三郎、砂糖取引は酒井勇、綿糸取引は安藤仁三郎の諸氏が分担執筆したと記している。

経済、とりわけ市場用語は「はしがき」でも述べられているように、市場に直接関わっていない者には特殊用語であって難解である。その意味でこの「市場用語解説」は、直接に社会経済を根底から具体的に支えている市場の言葉を解説していて、国際的に資本主

展に伴って、人間の意志とは別に生活様式も発展し、生活内容が世界的になったと述べている。従って、言葉も新しくなり、「新しい言葉を知ること、^{エヌブリ・ヌーボー}新時代精神を知ること」であり、「モダン語を知らずして、新時代を解することは出来ない」と述べて、ここにこの辞典発行の意義を見出している。またとくに、非常時、スポーツ、社会科学、映画、ウルトラモダンなどに関わる用語に「全力をあげた」と強調している。

収録語彙数は外来語が約 1460 (全体の約 69%)、日本語 (和製化された外来語などを含む) は約 650 (全体の約 31%) で、総語彙数の約 2110 は 1 年 3 カ月前に発行された『現代術語辞典』(大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、この言語関係資料集で復刻済み) の総語彙数の約 3.5 分の 1 なのだが、基本的に重要としている言葉には解説、説明を詳しくしている。なお、カタカナで立項した外来語の見出しには、すべて原語表記がなされている。

『増訂 哲学辞典 全』朝永三十郎 (文学博士) 編著 (東京宝文館、大正 8 年 10 月 10 日発行)。増訂 8 版、全 562 頁、22・5×15cm、改正定価・参圓八拾銭。初版発行は明治 38 年 1 月 1 日、同年 9 月 20 日に増訂再版を発行。

この辞典は初版発行から約 8 カ月余りで増訂版を出し、その後、約 14 年間で 8 版 (刷) を出しているのだから、約 1 年半ごとに増刷をしていたことになる。今回は増訂 8 版を復刻した。用語の配列は「50 音」順で、片仮名書きによる外来語と、日本語による訳語とは分けずに編集している。

本書の構成と頁数を見ると、巻頭に著者の「序」「再版序」があり、「凡例」「凡例追補」と続いて、その後は「邦術語句及人名索引」(全 34 頁)、「邦学索引追補」(全 3 頁)となっている。巻頭は全 47 頁である。次ぎに、本文である哲学用語の解説 (全 475 頁) がある (29 頁分の「哲学辞典追補」を含む)。巻末は「歐字人名索引」(「追補」を含む)、「獨術語句索引」(同前)、「英術語句索引」(同前)、「佛術語句索引」(同前)、「羅典術語句索引」(同前)、「希臘術語句索引」(同前)、「雑の部」となっていて、全 40 頁である。

著者は「序」で、日本には未だ、全般にわたって広く哲学語を説明し、この学問の研鑽に資せんとする者がいないと述べ、自らがそうした欠陥を充たすために哲学上の「学語」を説明する辞典を編纂するのだと述べている。また「凡例」では、「著者の創意」となるところは文体で示していると述べており、参考にした西欧の哲学史、哲学概論、その他の原著を挙げ、とくにボールドキンの『哲学・心理学辞典』に負うところが多いとしている。さらに、見出し語となる漢字の表記は当時の現代語の発音 (口語) に従うこととか、外国語の片仮名表記は困難をしたことなどが述べられる。この辞典では、哲学用語 (基本的にはドイツ語、英語、フランス語などで示す)、人名は原語でも表記されている。

西欧哲学を中心とするこの辞典は、通時的に見れば、古代ギリシア・ローマやキリスト教などの哲学に関する事項から、中世哲学、とくに哲学的神学 (スコラ哲学など) などを経て、近代哲学までを系統的に把握しようとしている。その意味で、近代日本の哲学に関わる理解を知る上で重要な一冊であり、解説が心理学、物理学、生物学、精神病理、神学など多岐にわたっている点は見逃せない。

立項された言葉でいえば、「感受」「意識」「精神」「認識」「自由」などの解説は緻密である。とりわけ「物質」(解説が 11 頁に及ぶ)、「唯心論・唯物論」(同、7 頁) などはそうであり、「哲学辞典追補」(前出) では更に詳しく「科学」(同、3 頁)、「唯心論」(同、18 頁

心理学の用語などは抑えて、文学、絵画、音楽などの芸術用語、とくにスポーツ、放送、映像、写真、映画、演劇などの分野で使われる用語に力を入れているところに特色がある。また、ファッション、生活、社会風俗に関わる用語も多く立項しており、スラング（とくに拘摸仲間で使う用語が目立つ）などもよく収集している。この辞典に掲載の語彙数は、和製の外来語を含めて外来語が約 775、日本語が約 324 で、「1300 程の世界的モダン語を満載」（「序」）と著者が言う数よりは少ない。なお、カタカナで立項した外来語の見出しには、すべて原語表記がなされている。

『現代術語辞典』『毎日年鑑』附録、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編纂（大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、昭和 6 年 10 月 1 日発行）。初版、全 208 頁、19×13cm。附録なので定価の記載はない。

この辞典は1932（昭和7）年版の『毎日年鑑』の附録として、その前年に発行された。用語の配列は「50音」順であり、日本語、外来語と分けてはいない。巻末には「50音」引きでも「いろは」引きでも可能なように、一字音による簡単な「索引」（頁数付き）を載せている。

巻頭に編纂意図を記している。それによれば、日本は「無遠慮に外国語の闖入する國」であり、「歸化」して日本語に新味を加える代わりに、日本人を苦しめることも一通りではなく、この小辞典は、そういった言葉を「ページ数のゆるすかぎり集めたもの」だと述べている。また、新聞社の編纂、発行ということを生かして、「新聞面に現れる流行語、隠語、科学的術語などで難解と思はれるものも出来るだけ加へたつもりです」とも述べている。

確かにこの辞典の特色としては、新聞掲載の記事を生かして、同時代の世界的な視野に立って、政治、社会、経済用語をはじめとして、殆ど全分野における言葉を集めていることが挙げられる。とくに、医学、科学、化学用語や麻雀用語の立項が目新しい。集録語彙数から見れば、外来語は約 4640（全体の約 62%）、日本語（和製化された外来語などを含む）は約 2835（同、約 38%）で、全部で約 7475 の、雑誌の附録の辞典としては多い全語彙数と、なかでもジャーナリスティックな立場を生かした、外来語の語彙数の多さが特色になっている。

なお、「ク」の項目中に「カ」の項目に入れなければならない言葉である 37 項目が混入している。「カ」の項目における落丁である。

○第2巻

『モダン流行語辞典』 趙町幸二編著、喜多壮一郎（早大教授）監修（実業之日本社、昭和 8 年 1 月 8 日発行）。2 版、全 446 頁、16×12cm、壹圓參拾錢。初版発行は昭和 8 年 1 月 7 日。

編集の仕方は、用語の配列を「50音」順とし、日本語、外来語と分けなくてこれに従って配列している。巻頭には「索引について」の説明と、「アイウエオ順索引」とがある。巻末には「標準常識として」「知っておきたい」（「序」後出）として、55 頁にわたる「附録」欄を設け（391 頁以降）、30 項目を立てて、世界の自然、政治、報道、貨幣、建築、乗り物、発明、スポーツなどに関わる事実の記録を紹介している。

巻頭の「序」で著者は、満洲事変下の「非常時」日本を意識しながら、時代の急激な進

各言葉を、語源、語義、歴史、文化・文芸との関わり、国内外の社会情勢などに言及した長文の説明をしているこの辞典は、当時の「プロレタリア文芸」を詳しく知ることの出来る事典として貴重である。

『文學新語小辞典』生田長江編著（新潮社、大正6年5月15日発行）。第18版、全223頁、13・3×9cm、参拾八錢。初版発行は大正2年10月10日。

編集の仕方は、用語の配列を「50音」順とし、外来語は字音仮名遣いに従った日本語の各項目の後に一括して配列している。巻末には2頁にわたり「正誤表」が附されている。

巻頭には「凡例5則」があり、この辞典は、文学上の新語、熟語、外国語を収集し、文学初心者の方に供しようとしていること、常用の外国語辞典の要求にも応じるものであること、言葉の解釈は常識的であることに努めたことなどが記されている。確かに、1910年代の日本の文学用語辞典としては、立項していない重要な用語があったり、比較文学的な見方を含む、用語と他の用語との関連性の稀薄な解説などがあって、ごく一般的な説明になっていることは否めない。

それは例えば、ヨーロッパの前衛芸術運動の一つであった「フューチャリズム」（未来主義、1909年が起点）が立項されているのに、それに先立つ同運動の表現主義（1905年頃が起点）やキュビズム（1907年頃が起点）などが立項されていないことなどを見ても明らかである。とはいえ、この後に来る「現代」（モダン）という時代の文学用語と比較する際には、この年代（近代）の一つの解釈、認識を知るうえで大切な辞典の一冊になるだろう。

この辞典には、日本語の項目が派生語を含めて約458、外来語の項目が派生語を含めて約664あり、この数の多さがこの辞典の大きな特色の一つになっている。なお、この辞典に掲載の言葉は「版を重ねるに従って完備させて行きたい」（「凡例5則」）とあるので、初版から約3年7ヵ月後に発行された第18版を復刻した。

『モダン語辞典』鵜沼直編著（誠文堂、昭和6年2月28日発行）。第45版、全124頁、15×9cm（四五版）、拾錢。初版発行は昭和5年12月25日。

編集の仕方は、用語の配列を「50音」順とし、日本語、外来語と分けずにこれに従って配列している。この辞典は当時、誠文堂がシリーズで100冊ほど出版していた「十銭文庫」の一冊で、目録の第46番目に当たる（巻末の広告を参照）。なお、今回復刻したのは第45版であるが、昭和6年までに第58版まで出版されており、よく利用された辞典である。

巻頭の「發刊の辭」では誠文堂主の小川菊松が「十銭文庫」刊行の意図を述べ、書籍、新聞雑誌は「日常生活の必需品」（日用品）と信ずるので、約20年間を「実用書籍の出版」、「一般書籍の実用化」に専念してきたと記している。「實生活に即したる名著」の刊行がねらいだったということである。

「發刊の辭」に続けて編著者の鵜沼直は「序」で、「読み物であること」を買って欲しいとしたうえで、この辞典の特色として「ナンセンス的要素」が多数織り込まれていること、「使用例」が多いこと、「特だね語」が多いこと（「自慢出来る」と述べている）などを挙げている。そして、総じてこの辞書は「ナンセンス・ウキット・ユウモアのカクテルとしてダンゼン蓋世の奇書」だと、自らがその特色を要約し主張している。

編著者が述べるように、確かにこの辞書はユニークであり、政治、社会、思想・哲学・

近現代日本語辞典選集【モダン語辞典・事典・用語編】

○第1巻

『近代詩用語辞典』河合醉茗編著（紅玉堂書店、大正13年10月5日発行）。初版、本文は全379頁（うち26頁は「引用詩書解題」）、15×10・8cm（A6判）、壹圓八拾錢。

編集の仕方は、巻頭に「題言」、「開巻の始に」をおき、「目次」「引用詩書解題」と続く。詩の用語の配列は「50音」順などによらず、詩集に頻出する代表的な詩語（例えば、「孤獨」「憂鬱」「悲哀」「戀愛」「労働」「故郷」など）を選んで編集している。選ばれた詩語は80であり、その典拠としての92冊の詩集の解説が巻末の「引用詩書解題」である。

「題言」で編著者の河合醉茗は、日本最初の詩集『新体詩抄』から数えて約40年の現在を振り返り、「人間性の目覚め」は「詩を求むる心から發生」すること、詩の言葉は「優れた人間性の現はれ」であることを述べ、「詩は如何なるときにも人生の道づれである」と結んでいる。「開巻の始に」では、本書は島崎藤村の『若菜集』（明治30年）から大正10年の間に出された個人の詩集を対象にしていること、童謡、民謡、長篇の物語詩からは選んでいないことなどを記している。なお、「引用詩書解題」に紹介されている詩書に基づけば、引用している詩集は、土井晩翠の詩集『天地有情』（明治32年4月発行）から、室生犀星の詩集『抒情小曲集』（大正12年7月発行）までである。

また、題名に「用語辞典」とはあるが、本書は単なる詩の用語集ではなく、「模範としての詩の言葉を集め」ている書であることが断られており、その利便性の「第一は詩作の暗示を得」られること、また「形式上の参考」になることだとされている。つまり、「さういふ手引こそ初心者に至要」だというわけである。

日本の「現代詩」が始まる直前に刊行された「近代詩」の辞典（個人詩集の解説を含む）として貴重である。

『プロレタリア文芸辞典』山田清三郎、川口浩編著（白揚社、昭和5年8月25日発行）。初版、全388頁、19×12・5cm、壹圓五拾錢。

編集の仕方は、巻頭に「項目」と「人名」とに分けた「50音」順による「目次」を置く。但し、「項目」のなかの「片假名文字」（外来語など）は、「50音」の各項目のなかで後ろに回している。「項目」数は全1240（うち、外来語などの数は394）、「人名」数は全189（うち、外国人名の数は61）である。

「序」では本書の出版の理由が述べられ、無産階級運動が発展し、社会科学、社会問題などに関する辞典が発行されているにもかかわらず、プロレタリア文芸に関する用語、問題、事件などに関する、全体的な解説を企てたものが殆どなく、労働者農民諸君の要望もあり刊行となったとある。

また本書は、プロレタリア文芸に関する諸種の言葉だけではなく、社会科学に関する言葉（政治、経済、哲学など）も採録しているので、文芸辞典であると同時に社会科学辞典の性質も兼ね備えていると述べている。さらに、辞典の解説の観点はマルクス主義により行うことを努めているので、説明自体が国家、社会、資本家などに対して批判的になっており、全体からみれば一つのまとまった「プロレタリア文芸講座」をなしているとも述べている。本書の編纂には猪野省三、藤枝丈夫、松本正雄が助力している。

プロレタリア文学、芸術の運動が最も盛んであった昭和初年代の最初期に、立項された

近現代日本語辞典選集

【モダン語辞典・事典・用語編】

解 題

澤 正 宏

(福島大学名誉教授)

きんげんだい にほんごじてんせんしゅう ごじてん じてん ようごへん だい かん
近現代日本語辞典選集【モダン語辞典・事典・用語編】第4巻

発行 2020年9月30日 初版第1刷

解題 澤 正宏

発行者 川角功成

発行所 有限会社 クロスカルチャー出版

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-7-6

TEL 03(5577)6707 FAX 03(5577)6708

印刷・製本 石川特殊特急製本株式会社

ISBN 978-4-908823-74-9 C3381(全4巻セット)

ISBN 978-4-908823-78-7 C3381(第4巻)

2020 Printed in Japan

